宮城県岩沼市文化財調査報告書第 19 集

原遺跡第２次調査概要報告書

２０１８年３月

岩沼市教育委員会

原遺跡第２次調査概要報告書

例　言

1　本書は宮城県岩沼市南長谷字上原ほかに所在する原遺跡の第 2 次調査概要報告書である。

2　本調査は、原遺跡の内容確認のため実施したものである。

3　現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が平成 29（2017）年 11 月 1 日～ 12 月 28 日にかけて実施した。調査面積は、349.0㎡である。

4　調査に際しては土地所有者である鈴木清一氏・鈴木和吉氏、農事組合法人原生産組合から御理解・御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

5　整理・報告書作成は平成 30（2018）年 1 月 4 日～ 2 月 28 日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行った。

6　調査、および本書の執筆・編集は、生涯学習課文化財係　川又隆央・永井三郎・太田昭夫が担当した。

7　発掘調査、および整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

相沢 清利　恵美 昌之　大橋 泰夫　大村 周一　小川 淳一　押木 弘己　日下 和寿
斎野 裕彦　白鳥 良一　鈴木 琢郎　千葉 宗久　徳竹 亜紀子　永田 英明　藤木　海
堀　　裕　村田 晃一
宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所

8　本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。

（1）遺構の用語、および略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。

（2）遺構実測図の水糸高は海抜を示す。

（3）縮尺は図に示すとおりである。

（4）土層、および土器の色調は「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）による。

9　第 1 次調査は平成 28 年度県営圃場整備事業に伴い実施されたもので未報告である。

10　第 2 次調査の成果については、第 44 回古代城柵官衙遺跡検討会等で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。

11　発掘調査の記録類、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

12　発掘調査・整理作業参加者は以下の通りである。

塩谷 信行、小林 国子、齋藤 新彌、佐藤 悦子、佐藤 トシ子、高橋 紀美子、南城 美代子
蓮沼 秀子、渡辺 純子、渡辺 幹雄

目　次

例　言

第１章　遺跡の概観
第１節　位置と地理的環境 …… 1
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2

第２章　調査に至る経緯と調査の方法
第１節　第１次調査の概要 …… 4
第２節　第２次調査に至る経緯 …… 7
第３節　調査方法と調査経過 …… 7

第３章　調査の概要
第１節　基本層序 …… 9
第２節　発見された遺構 …… 9
第３節　発見された遺物 …… 21
第４節　出土遺物から見た特徴 …… 27
第５節　遺構の年代 …… 27

第４章　総　括
第１節　調査のまとめ …… 29
第２節　遺跡の評価と今後の課題 …… 29
引用・参考文献 …… 30

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図　岩沼市の地形分類図 …… 1
第 2 図　岩沼市域の遺跡分布図 …… 3
第 3 図　原遺跡第 1 次調査全体図 …… 5
第 4 図　第 1 次調査の状況 …… 6
第 5 図　遺跡範囲と調査地点 …… 7
第 6 図　第 2 次調査における遺物取上げグリッド設定図 …… 8
第 7 図　基本層序（1/40）…… 10
第 8 図　第 2 次調査全体図（1/200）…… 11
第 9 図　竪穴建物跡位置図（1/200）…… 12
第 10 図　SI4、SI6、SI7、SD2 土層断面図（1/60）…… 13
第 11 図　SI11、SI12、SI13、SI26、SD5 土層断面図（1/60）…… 14
第 12 図　掘立柱建物跡および半截実施柱穴跡位置図（1/200）…… 15
第 13 図　掘立柱建物跡 SB1・SB2（1/60）…… 16
第 14 図　掘立柱建物跡 SB3（1/60）…… 17
第 15 図　柱穴跡土層断面図（1/60）…… 18
第 16 図　材木塀 SA1 平面図（1/150）　断面図（1/60）…… 20
第 17 図　竪穴建物跡出土遺物実測図 …… 22
第 18 図　柱穴跡出土遺物実測図 …… 24
第 19 図　溝跡出遺物実測図 …… 24
第 20 図　土坑出遺物実測図 …… 24
第 21 図　その他の出土遺物実測図 …… 25

表 目 次

表 1　岩沼市域の遺跡一覧表 …… 3
表 2　竪穴建物跡出土遺物観察表 …… 23
表 3　柱穴跡出土遺物観察表 …… 24
表 4　溝跡出土遺物観察表 …… 24
表 5　土坑出土遺物観察表 …… 24
表 6　その他の出土遺物観察表 …… 26

写真図版目次

写真図版 1
1 トレンチ遺構検出状況（南から）（北西から）

写真図版 2
2 トレンチ遺構検出状況（西から）（北東から）

写真図版 3
3 トレンチ遺構検出状況 （西から）（南西から）

写真図版 4
4 トレンチ遺構検出状況（西から）（南東から）

写真図版 5
1 トレンチ北側竪穴建物群（南東から）
SI4 カマド（南東から）
SI4 遺物出土状況（南西から）
SI6 土師器坏・甕出土状況（南東から）
SI6 土師器甕内骨片出土状況（南東から）
SI6、SI7（北東から）
SI12 遺物出土状況（南西から）
SI13 遺物出土状況（南東から）

写真図版 6
掘立柱建物跡 SB1・2（南西から）
掘立柱建物跡 SB1　P68 半截（南から）
掘立柱建物跡 SB2　P69 半截（南から）
掘立柱建物跡 SB3（北西から）
P29 半截（南から）
P37・38 半截（北東から）
P56 半截（南から）
P58 半截（南から）

写真図版 7
P62 半截（北から）
P105 半截（北から）
1 トレンチの柱穴跡群（南東から）
2 トレンチの柱穴跡群（東から）
SA1 材木抜取痕跡（2T　北西から）
SA1 材木抜取痕跡（2T　東から）
SA1 南側屈曲部（北西から）
SA1 北側屈曲部（南から）

写真図版 8
2 トレンチ拡張部（北西から）
調査区全景（上空から）

写真図版 9
原遺跡上空から岩沼市街を臨む（南から北を臨む）
原遺跡上空から阿武隈川を臨む（北西から南東を臨む）

写真図版 10
竪穴建物跡出土遺物 1　竪穴建物跡出土遺物 3
竪穴建物跡出土遺物 2　竪穴建物跡出土遺物 6

写真図版 11
竪穴建物跡出土遺物 4　竪穴建物跡出土遺物 7
竪穴建物跡出土遺物 5

写真図版 12
竪穴建物跡出土遺物 8　竪穴建物跡出土遺物 10
竪穴建物跡出土遺物 9　柱穴跡出土遺物 1

写真図版 13
柱穴跡出土遺物 2　溝跡出土遺物 1

写真図版 14
溝跡出土遺物 1　その他の出土遺物 2
溝跡出土遺物 2　その他の出土遺物 3
土坑出土遺物 1　その他の出土遺物 4
その他の出土遺物 1

写真図版 15
その他の出土遺物 5　その他の出土遺物 10
その他の出土遺物 7　その他の出土遺物 11
その他の出土遺物 8

写真図版 16
その他の出土遺物 9　その他の出土遺物 14
その他の出土遺物 12　その他の出土遺物 15
その他の出土遺物 13

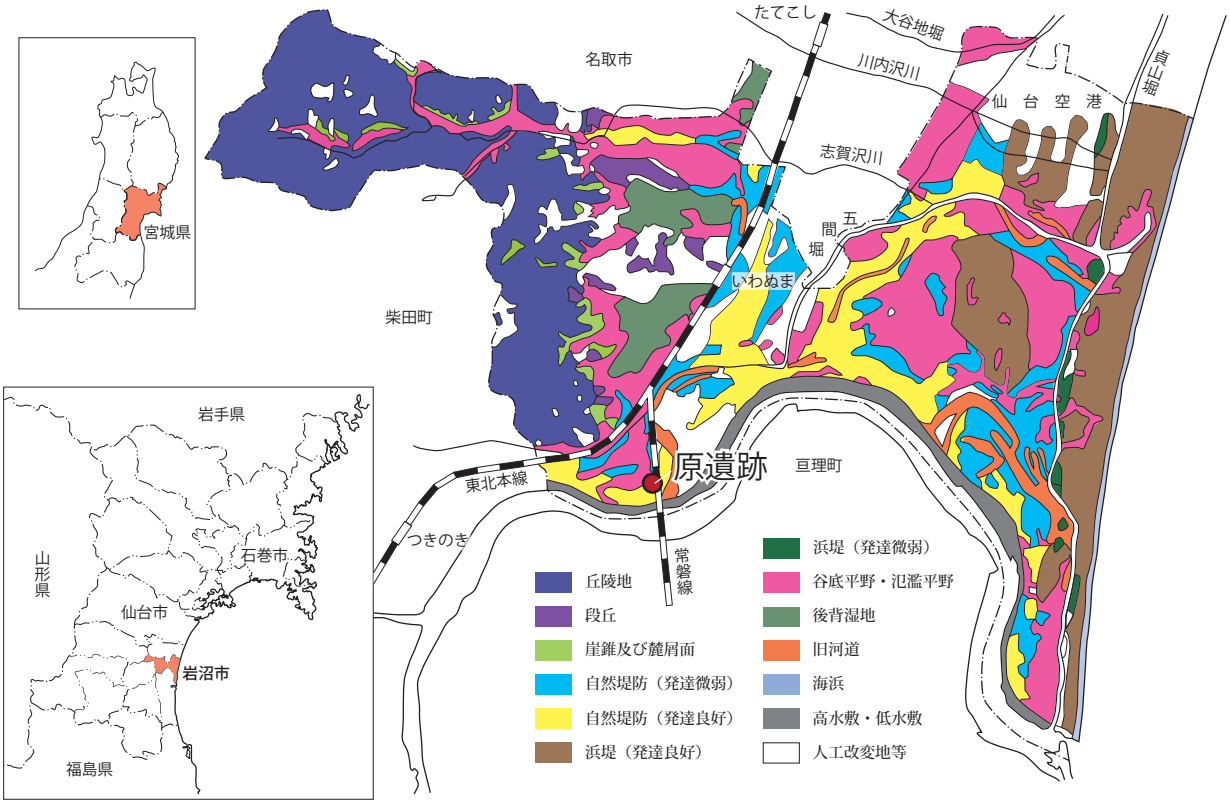
写真図版 17
その他の出土遺物 16　その他の出土遺物 17

第１章　遺跡の概観

第１節　位置と地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内６位の 239km、流域面積は 5,400㎢を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道４号と同６号、JR 東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高 100 ～ 300m）と高館丘陵（標高 200 ～ 300m）、さらにこれらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高 10 ～ 30 mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋までの間に７～８km の幅をもって発達する。この沖積平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から 200 ～ 300m 北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。



第１図　岩沼市の地形分類図

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近・現代にかけての遺跡が 67 箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成 23 年（2011）から平成 26 年（2014）にかけて行われた岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下にこれまでの発掘調査などによって得られた古墳時代、および古代の知見について、その概略を記す。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【２】では、平成 24 年（2012）の市史編纂事業に伴う古墳周溝の発掘調査において、土師器や須恵器のほか、底面から一木二又鋤が出土した。また、地表に顕在する全長約 39 mの墳丘は周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約 48 mを測る前方後円墳であったことが推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

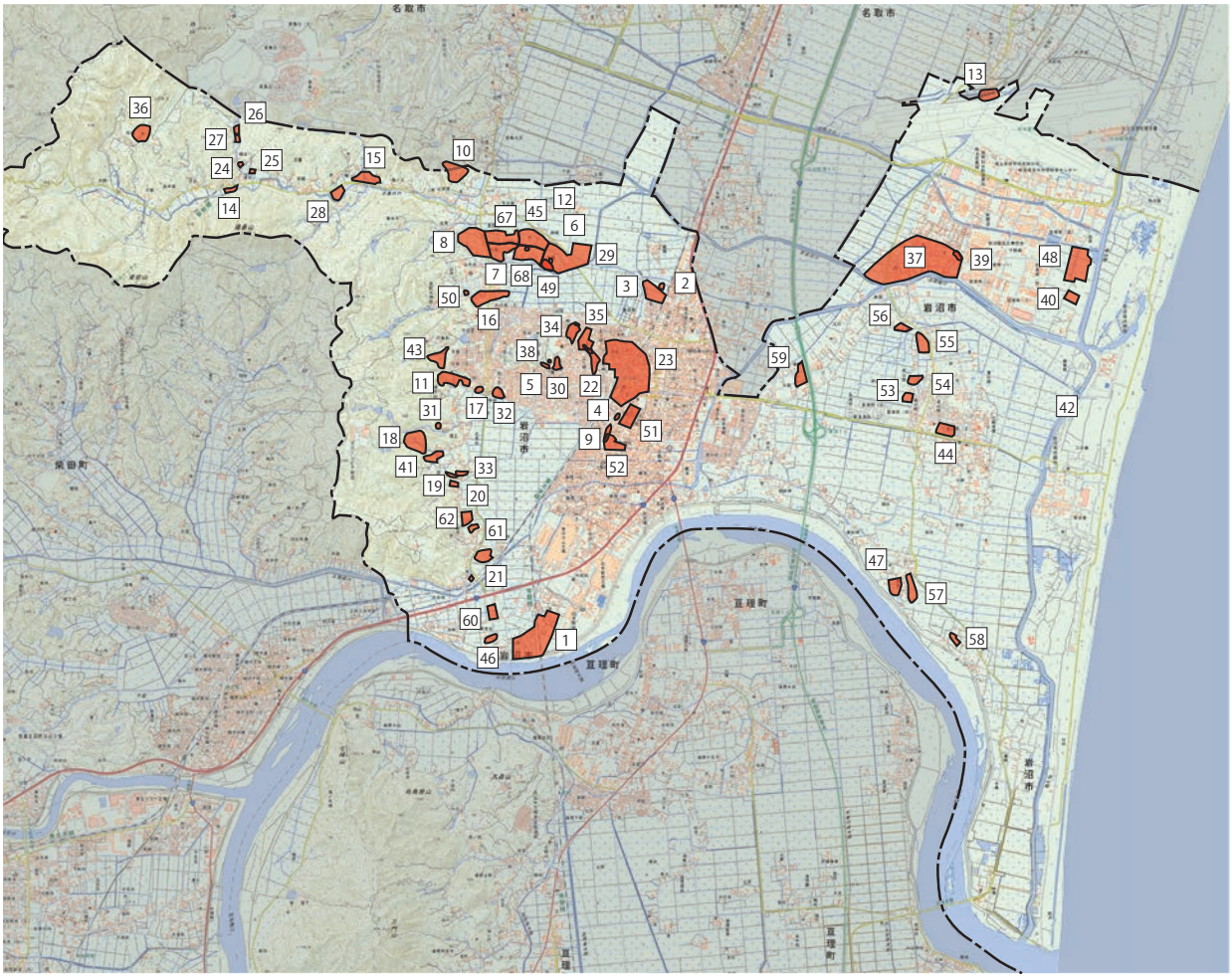
横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【４】、二木【９】、土ケ崎【22】、引込【30】などの横穴墓群では過去に発掘調査が行われ、７世紀前半頃から造営が開始され、８世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

集落遺跡では北原遺跡【８】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【16】でも、平成 25 年（2013）の駐車場整備工事に伴う発掘調査において、同時期の竪穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では、平成 24 年（2012）の河川改修工事に伴う確認調査の際、前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなった。中期以降の様相については市内では遺物の発見が少なく判然としないが、平成 29 年（2017）の五間堀川河川改修事業に伴う下野郷館跡【37】の発掘調査では南小泉式の土師器坏が出土し、第Ⅱ浜堤列上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される。

古　代

古代の遺跡については、近年、開発や市史編纂事業による発掘調査が増加傾向にある。集落遺跡としては北原遺跡、熊野遺跡で７世紀末から 10 世紀前半にかけての竪穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2016）。なお、本遺跡が所在する「玉崎地区」においては、これまで南玉崎遺跡【46】、樋遺跡【60】で土師器・須恵器などが出土している。このうち樋遺跡では市史編纂事業による発掘調査のほか、岩沼西部地区圃場整備事業に伴う発掘調査が実施されており、７世紀末～８世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台坏などが発見されている。

このほか慈覚大師開基の伝承を有する岩蔵寺【36】には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が存在する。岩蔵寺は中世には地域の霊場として機能していたと考えられており、現存する薬師堂の背後で造成されている平場には板碑が立ち、その周囲には多数の人頭大の礫を集めた集石遺構が残る。さらにこの平場の一画では小石を塚状に集積した遺構がみられるが、市史編纂事業による発掘調査では遺構底面で火を焚いた痕跡と須恵系土器の坏が発見されており、平安時代において何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている。



第 2 図　岩沼市域の遺跡分布図（国土地理院発行 電子地形図 25000 に加筆）

表 1　岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代
1	原遺跡	古墳・古代	23	鵜ヶ崎城跡	縄文・弥生・中世・近世	45	長塚北遺跡	縄文・古墳・古代
2	かめ塚古墳	古墳	24	八森Ａ遺跡	縄文	46	南玉崎遺跡	縄文・古代
3	かめ塚西遺跡	弥生・古墳	25	八森Ｂ遺跡	縄文	47	西須賀原遺跡	古代
4	丸山横穴墓群	古墳	26	銅谷Ａ遺跡	縄文・近世	48	高大瀬遺跡	古墳・古代
5	白山横穴墓群	古墳	27	銅谷Ｂ遺跡	縄文・近世	49	長徳寺前遺跡	近世
6	新明塚古墳	古墳	28	新宮下遺跡	縄文	50	中ノ原遺跡	中世
7	杉の内遺跡	弥生・古墳・古代	29	上根崎遺跡	縄文・弥生・古代・中世	51	丸山遺跡	中世・近世
8	北原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	30	引込横穴墓群	古墳	52	竹駒神社境内遺跡	中世・近世
9	二木横穴墓群	古墳	31	古関山遺跡	弥生・古墳	53	新筒下遺跡	古代
10	山畑南貝塚	縄文・古代	32	新田遺跡	縄文・古代	54	沼前遺跡	古代
11	長谷寺横穴墓群	古墳	33	畑堤上貝塚	縄文・古墳・古代	55	西土手遺跡	中世
12	長塚古墳	古墳	34	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	56	前條遺跡	古代
13	孫兵衛谷地遺跡	古墳前	35	朝日遺跡	古墳・古代・中世	57	刈原遺跡	古代
14	大日遺跡	縄文	36	岩蔵寺遺跡	縄文・古代・中世	58	高原遺跡	中世
15	下塩ノ入遺跡	縄文	37	下野郷館跡	古墳・古代・中世・近世	59	上中筋遺跡	古代・中世
16	熊野遺跡	古墳・古代	38	白山塚	近世？	60	樋遺跡	古代・中世
17	平等山横穴墓群	古墳	39	舘外遺跡	古代	61	柳遺跡	古墳・古代
18	新館跡	中世	40	にら塚遺跡	古墳・古代	62	台遺跡	縄文・弥生
19	畑堤上横穴墓群	古墳	41	新館前遺跡	縄文・古代	63	長塚遺跡	縄文・古墳
20	根方泉遺跡	弥生・近世	42	貞山堀（木曳堀）	近世	64	上小渕遺跡	弥生・古墳・古代
21	長谷小館跡	室町	43	竹倉部遺跡	弥生・古墳・古代			
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	44	新田東遺跡	奈良・中世・近世			

第２章　調査に至る経緯と調査の方法

第１節　第１次調査の概要

平成 25 年（2013）11 月に新規農業農村整備事業についての照会が仙台地方振興事務所からあり、岩沼市教育委員会では県史跡であるかめ塚古墳をはじめとした 13 遺跡地が対象範囲内に位置、あるいは隣接している旨を回答した。その後の協議を経て、平成 28 年（2016）６月 22 日付で「岩沼西部地区埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台地方振興事務所と岩沼市によって締結され、同年 10 月１日より調査準備に着手した。

原遺跡第１次調査は 10 月 14 日から開始した。調査は排水路敷設部分に限定したことから、当初は幅２ｍ、長さ５～ 10 ｍの試掘トレンチを 11 箇所設定した。しかしながら、掘削中に多数の遺物が発見され、また遺構確認作業でも竪穴建物跡や大型の堀方を持つ柱穴跡が発見されたことから、工事によって失われる部分においては本発掘調査を実施し、記録保存に努めた。以下にその概要を記す。

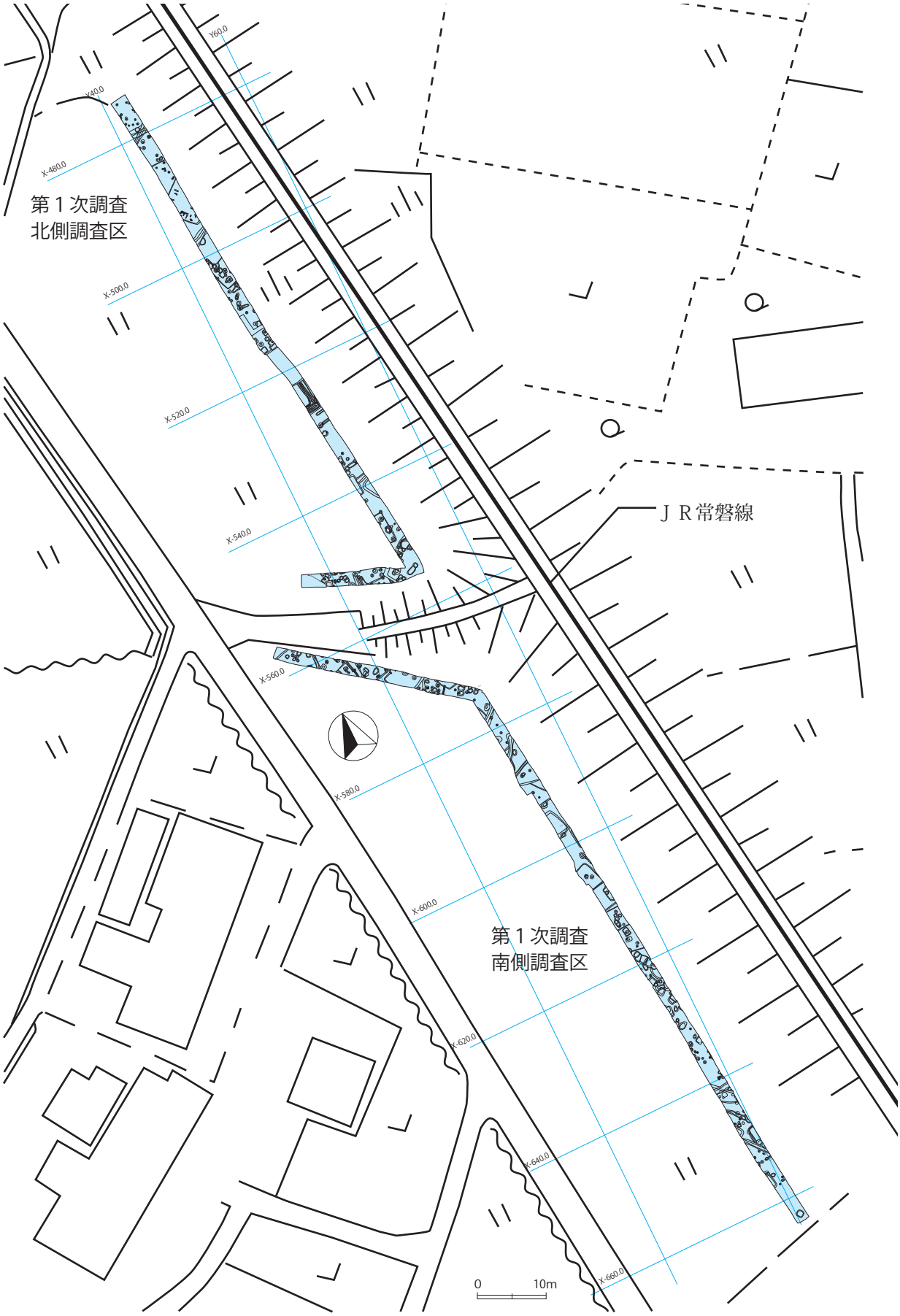
第１次調査では、現地表面から 60 ～ 100cm ほど下位に存在している自然堤防形成層と考えられるにぶい黄褐色砂質シルト上面で遺構･遺物の確認に努めた。調査区は旧踏切へ至る通路を境として、南側と北側の２つの調査区を設定して調査を実施した。

北側調査区では、竪穴建物跡９棟、掘立柱建物跡１棟、溝跡７条、土坑 12 基、柱穴跡を 89 穴確認した。各遺構の年代観については、今後の出土資料の整理作業を経て本報告の際に詳述するが、古墳時代後期から平安時代にかけての遺物が多数出土している。

北側調査区で発見された遺構で特徴のあるものを記すと、古墳時代後期の土器を出土した SI002 竪穴建物跡は、床面に大量の焼土と炭化物が堆積し、等間隔で炭化木材が並んでいる様子が見られた。この炭化木材は付近に柱穴が見られなかったことから、火災にあった竪穴建物の屋根材が焼け落ちた可能性が考えられる。また古墳時代終末期頃の可能性がある SI003 竪穴建物跡では、北壁に設置されたカマドの燃焼室内に、土師器小型甕を逆位に設置して支脚として使用していたことが明らかとなった。そして平安時代と考えられる SI008 竪穴建物跡は、一辺が７ｍ以上になるような大型の竪穴建物であることが判明した。調査区中央付近で４穴が確認できた SB001 掘立柱建物跡は、いずれの柱穴も調査区外へ展開するため全容は不明ながらも、東西方向に主軸を有すると考えられる。各柱穴とも方形を意識して掘られており、官衙的な施設を構成する建物であった可能性がある。なお、方形を呈する柱穴は調査区内でも南側を中心に点在しており、今後の調査の中で未発見の建物跡の発見が期待される。

南側調査区では、竪穴建物跡 16 棟、掘立柱建物跡１棟、溝跡７条、土坑 30 基、柱穴跡を 134 穴確認した。また古墳時代終末期から平安時代にかけての遺物が多数出土している。

南側調査区で発見された遺構で特徴のあるものを記すと、奈良時代と考えられる SI012 竪穴建物跡では、カマドより完形の土師器甕が２個体出土している。また同様に奈良時代の SI017 竪穴建物跡では、床面、および遺構内の堆積土中から大量の遺物が出土している。そして SI023 竪穴建物跡からは、東海地方で生産された可能性がある須恵器の円面硯が出土した。掘立柱建物跡は調査区中央付近で SB002 掘立柱建物跡が確認されている。この遺構は各柱穴跡の掘方が一辺１ｍほどを測



第３図　原遺跡第１次調査全体図

北側調査区全景（北西から）

SI002 竪穴建物跡（南から）

SI003 竪穴建物跡（南から）

SI001 遺物出土状況 （南から）

南側調査区全景（北西から）

大型の柱穴列（北西から）

円面硯出土状況（南から）

SD012 遺物出土状況（西から）

第 4 図　第 1 次調査の状況

り、形状は方形であることから官衙的な施設の中でも中枢的な機能を有した建物である可能性が高く、遺跡の性格を考える上では極めて重要な意味を持つ遺構である。溝跡では調査区南側で確認された SD012、SD013 溝跡が注目される。SD012 溝跡は東西方向に延びるものであるが、遺構内より奈良時代頃と考えられる須恵器甕片が集中して発見されている。また SD012 溝跡より古い SD013 溝跡は、上幅が約 2.5 ｍを測るものであり、さらに 3 時期ほどの変遷が認められることから、古墳時代に営まれた集落の外側を囲う堀のような機能も考慮できる。

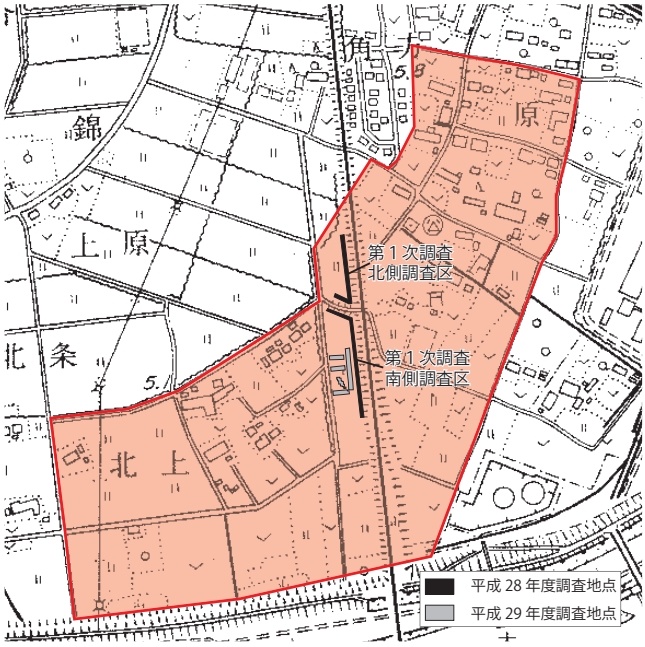
以上のように原遺跡の調査成果からは、この地に古墳時代後期頃から集落が営まれ、それが古墳時代終末期から奈良時代にかけて官衙的な性格を有する施設へと変貌することを推定できるようになった。この官衙的な性格を有する遺構を考える上で考慮すべき事柄は、遺跡の所在する玉崎地区では『延喜式』で記載される「玉前駅家」、または多賀城跡より出土した木簡に記される「玉前剗（関）」（宮城県多賀城跡調査研究所：1985）の存在が、予てより比定されていたことである。もとより第 1 次調査の調査面積は極めて限定されたものであることから、発見された遺構・遺物からこれらの施設と即断することは困難であるが、今後も計画的・継続的に調査をする中で、遺跡の性格・規模・構成を明らかにすることが強く望まれている。

第 2 節　第 2 次調査に至る経緯

第 1 次調査の成果を受けて、岩沼市では原遺跡を重要遺跡として認識し、将来的には市、さらには県などの史跡化を目指すことへの検討をはじめた。それにはまず、遺構・遺物が分布する範囲、時期ごとの遺構群の配置・変遷をはじめとする、より詳細な遺跡の構成内容を把握することが必要であると考え、岩沼市教育委員会生涯学習課ではこのための調査費用を平成 29 年 9 月議会に補正予算の計上を行った。議会での審議を経て予算案が可決・成立したことを受け、土地所有者、および農事組合法人原生産組合へ調査へのご理解とご協力をお願いたところ、幸いにもご快諾を頂いた。そこで第 2 次調査を稲の収穫が終了する平成 29 年 11 月 1 日より開始することとし、機材の準備や調査作業員の手配など準備を進めた。

第 3 節　調査方法と調査経過

第 2 次調査の目的は、第 1 次調査の南側調査区で確認された官衙的な様相を呈する大型の掘方を有する柱穴をはじめとする遺構群が、さらに西側へ展開するのか、という点に重点を置いた。このため調査区の設定は 1 トレンチを第 1 次調査区に並行した南北方向に設定し、2 ～ 4 トレンチはこれに直交するように東西方向で設定した。各トレンチの規模は 1 トレンチが長さ 40 ｍで幅が 4 ｍ、2 ～ 4 トレンチは長さ 14 ｍで幅が 4 ｍである。しかしながら、2 トレンチ東側の調査中



第 5 図　遺跡範囲と調査地点

に材木塀である SA1 が確認されたことを受け、材木塀の延長線上となる北側部分において新たに調査区（２トレンチ拡張部）を設定し、可能な限り詳細把握に努めた。

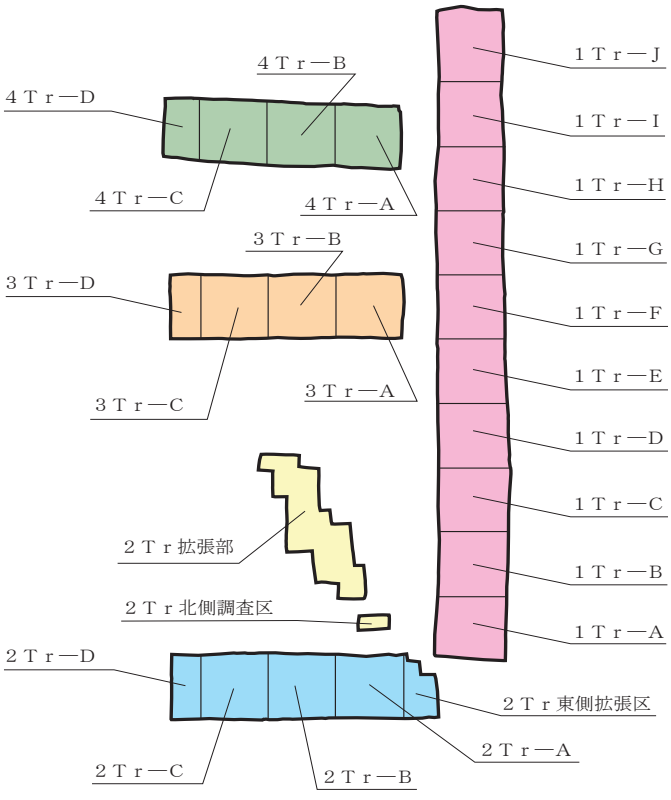
平成 29 年 11 月 1 日より重機等の搬入を実施し、その後 1 トレンチより重機を用いた表土掘削を開始した。重機による表土掘削は水田耕作土、および阿武隈川によって運搬された土砂を母材とした耕作土の除去までとし、その後は人力で遺物を包含する土層の掘り下げ、精査を実施し、遺構の平面確認に努めた。この遺物包含層の掘り下げに際しては、各トレンチごとにグリッドを設定し、遺物を取り上げている (第 6 図)。なお、今回の調査は前述のとおり遺構の分布把握を目的としており、遺構保存の観点から遺構の掘り下げ・半截はごく一部にとどめている。また調査では随時デジタルカメラによる写真撮影、土層断面図等の作成を行い、12 月 13 日にドローンによる空撮をし、12 月 28 日に現地調査を終了した。

遺構の平面測量に際しては、第 1 次調査との整合性をはかるために岩沼市が設置した２級基準点、および圃場整備事業の際に設置された３級基準点を使用した。使用した基準点それぞれの名称・座標数値は以下の通りである。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院が web 上で公開している「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメータファイルを用いて補正を行った数値である。

岩沼市２級基準点　　2-066　　X：-212501.506　Y：1615.862

圃場整備事業３級基準点　H 27-3-04　X：-212659.005　Y：1627.007

調査中には宮城県教育庁文化財保護課、多賀城跡調査研究所、岩沼市史編纂専門部会の考古部会、および古代・中世部会などをはじめとする多数の方々が来跡し、様々な助言等を頂いている。



第 6 図　第 2 次調査における遺物取上げグリッド設定図

第 3 章　調査の概要

第 1 節　基本層序

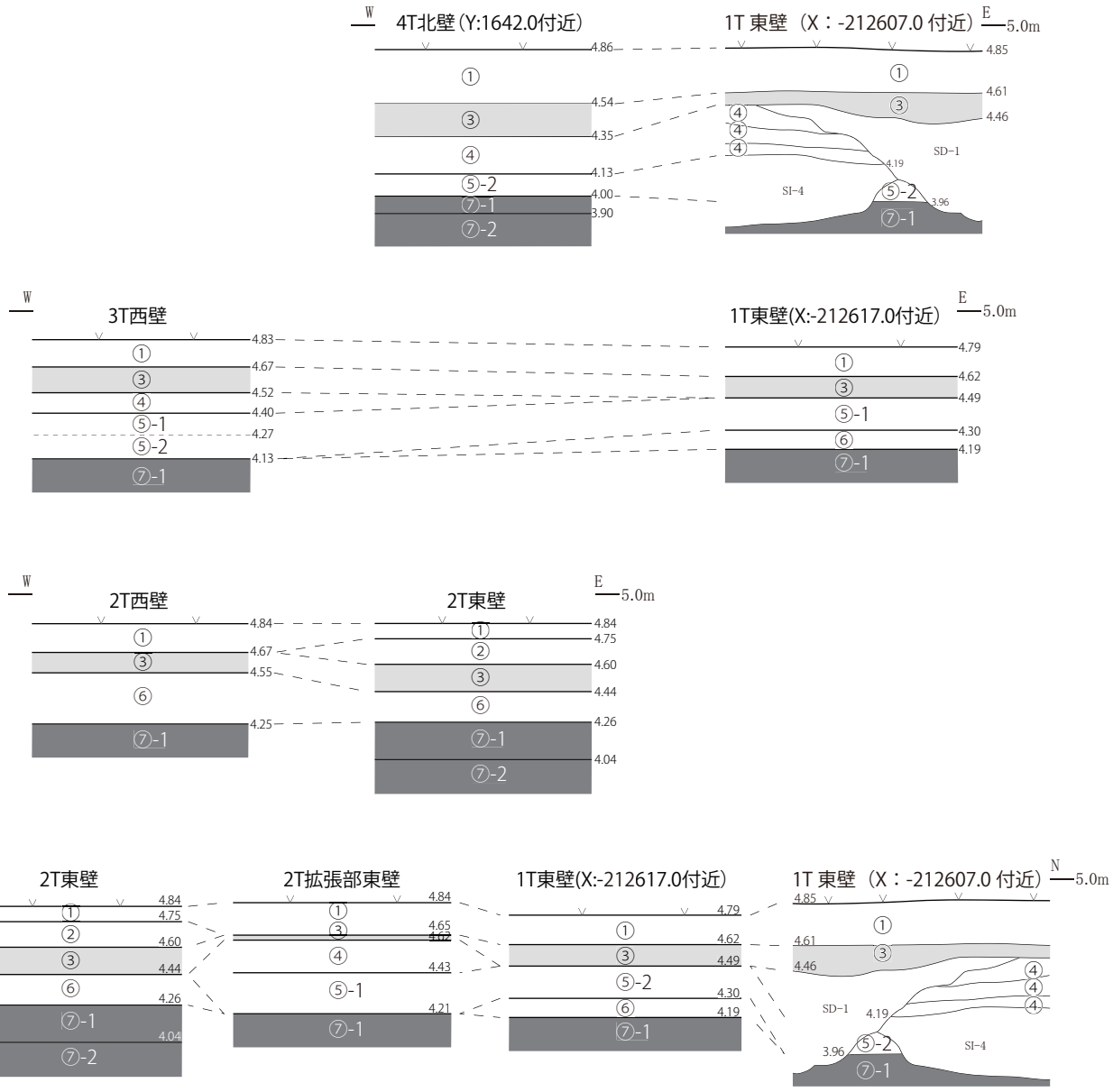
調査区内の土層柱状図を示し、遺跡の基本層序を示す（第 7 図）。調査区の現況は水田で、標高 4.80 ～ 4.85 mである。阿武隈川に近い南側の水田は一段高く、また西側の水田、および畑も標高が高くなっている。平成 28 年度の圃場整備により改変を受けているが、概ね北へ向かって傾斜しており、わずかながら東へも同様に傾斜している。①耕作土の厚さは 10 ～ 30 ㎝である。②褐色シルト層を部分的に挟み、その下には③黒褐色～暗褐色～灰黄褐色を呈するシルト層が見られるが、このシルト層は古代の遺物を多く含み調査区全域で確認できる。④にぶい黄褐色シルト層、⑤褐色～灰黄褐色砂層、⑥にぶい黄褐色シルト層を 20 ～ 40㎝の厚さで挟み、⑦黒色粘土層とさらに褐色粘土層がある。古代以前の自然堤防形成層と考えられ遺物を含まない。⑦層は北へ向かってわずかに傾斜するが、X:-212617.0 付近で傾斜を強め、1 トレンチ北端では調査の範囲内では確認できないほど深く下がる。平成 28 年度の第 1 次調査で、X:-212588.0 付近から褐色粘土が、X:-212582.0 付近から黒色粘土を確認しており、この間約 40m の深い谷地形が存在すると考えられる。④・⑤・⑥層は、⑦層が形成する深い谷を埋めながらも依然として若干の北側への傾斜を維持し、谷部分では⑤砂層が厚く堆積している。これらの層は遺跡の立地する場所が度々洪水の被害を被る場所であることを示し、また遺跡廃絶後に阿武隈川によって運搬された土砂である②層によって遺跡が良好に保存されてきたと言える。

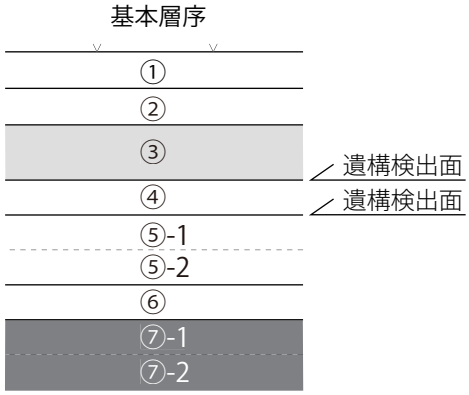
遺構検出面は、1 トレンチ東壁（X:-212607.0 付近）土層柱状図に見られるとおり、③遺物を包含するシルト層を除去した④にぶい黄褐色シルト層上面、さらに⑤砂層上面の 2 面がある。第 1 面で検出される遺構は、1 トレンチ SD1 や 3 トレンチ P66 ～ 69 のように埋土に十和田 a 火山灰を含むことから 10 世前葉以前のもの、第 2 面で検出される遺構はさらにそれ以前のものと言える。標高が高い南西寄りでは削平を受けたためか④層もしくは④層と⑤層いずれも確認されず、⑥層上面が遺構検出面となる。

調査では、①層・②層を重機により除去した後③層を人力で掘削し、④層上面、および⑤層（あるいは⑥層）上面での遺構確認を心掛けたが、遺構埋土との識別が難しく、部分的に⑦層上面まで下げて遺構を確認した。

第 2 節　発見された遺構

調査の結果確認した遺構は、竪穴建物跡 26 棟、掘立柱建物跡 3 棟、柱穴跡 126 穴（掘立柱建物跡含む）、材木塀跡 1 条、溝跡 10 条、土坑 2 基である。掘立柱建物跡は組み合わせの確実なもののみで、他は柱穴跡とした。出土した遺物は、土師器、須恵器、金属製品（刀剣類の鞘口金具）、石製品（砥石・石製模造品）等である。以下に各遺構種別ごとに概略を示す。

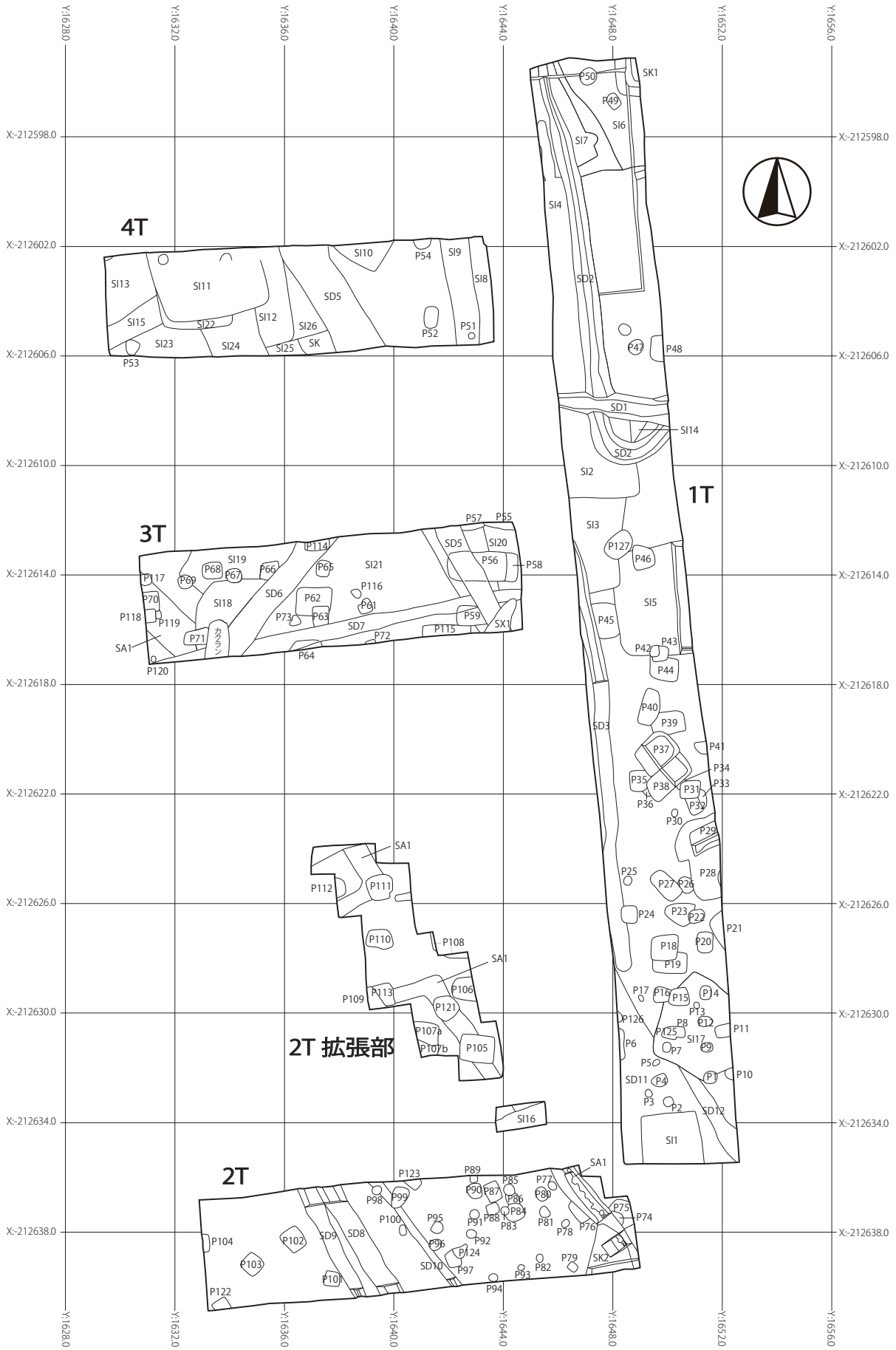




基本層序土層注記

①　：2.5Y4/4オリーブ褐色シルト。酸化鉄粒含む。しまり強い。粘性やや強い。表土(水田耕作土)。
②　：10YR4/4褐色シルト。10YR4/1褐灰色シルト粒含む。しまりやや強い。粘性やや強い。水田耕作土。
③　：10YR3/1黒褐色～10YR3/4暗褐色～10YR4/2灰黄褐色シルト。しまりやや強い。粘性やや強い。遺物包含層。
④　：10YR4/3にぶい黄褐色シルト酸化鉄粒少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
⑤-1：10YR4/4褐色粗砂。しまり弱い。粘性弱い。
⑤-2：10YR4/2灰黄褐色細砂。しまり弱い。粘性弱い。
⑥　：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。しまり強い。粘性やや強い。
⑦-1：10YR2/1黒色粘土。しまり強い。粘性強い。
⑦-2：10YR4/6褐色粘土。しまり強い。粘性強い。

第 7 図　基本層序（1/40）



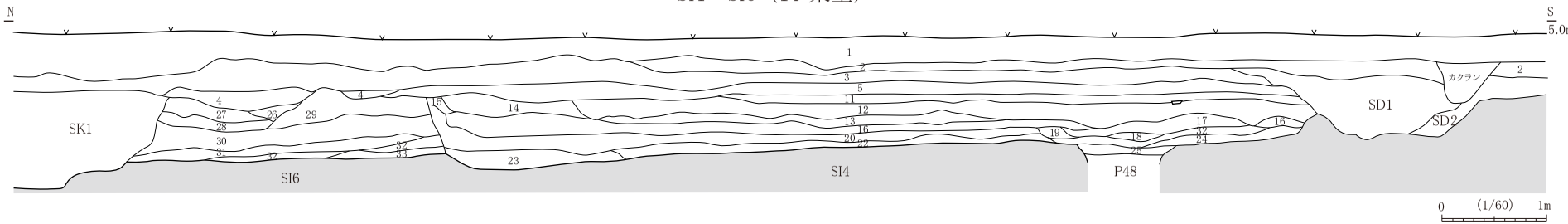
第 8 図　第 2 次調査全体図（1/200）

竪穴建物跡

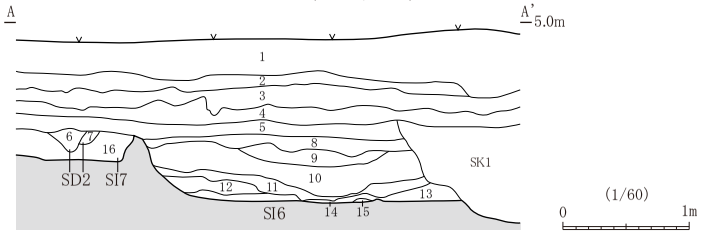
竪穴建物跡は 26 棟を確認した。1 トレンチ北半と 3 トレンチ、4 トレンチに密集する。柱穴跡が南半に集中するのとは対照的に竪穴建物跡は地山の標高の下がる北部に集中する。幅の狭いトレンチ調査であること、重複が激しいこと、遺構保護の観点から遺構の掘り下げを実施していないことから建物跡のプランの確認や重複関係の把握が満足にできなかった。平面形は

第 9 図　竪穴建物跡位置図（1/200）

SI4・SI6（1T 東壁）



SI6・SI7・SD2（1T 北壁）



SI6、SI7、SD2土層注記

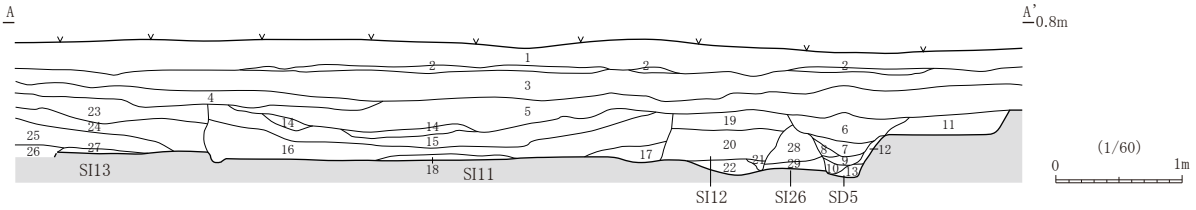
層No.	土色		土質	備考
1	オリーブ褐色	(2.5Y4/4)	シルト	酸化鉄を含む。しまり強い。粘性やや強い。
2	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。遺物含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
5	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む。しまり弱い。粘性弱い。
6	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色シルト粒を多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
7	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
8	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
9	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
10	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。遺物含む。
11	黒褐色	(10YR3/1)	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。
12	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	細砂	しまり弱い。粘性弱い。
13	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
14	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	炭化物粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。カマドか。
15	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒を多く含む。しまり強い。粘性強い。SI6貼床。
16	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む。しまり弱い。粘性弱い。

SI6、SI7土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	オリーブ褐色	(2.5Y4/4)	シルト	酸化鉄を含む。しまり強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。遺物含む。
3	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。遺物含む。
4	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
5	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
7	にぶい黄褐色	(10YR5/2)	シルト	しまり強い。粘性強い。
8	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒を微量含む。しまり弱い。粘性弱い。
9	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	炭化物粒を微量含む。しまりやや強い。粘性強い。遺物を含む。
10	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
11	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	褐色シルト粒・炭化物粒・焼土粒を多く含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
12	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	褐色シルト粒・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。遺物多く含む。
13	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	褐色粘土ブロックを含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
14	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
15	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	黄褐色シルト粒・炭化物粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
16	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。遺物多く含む。
17	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	焼土粒を多量に含む。炭化物粒を少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
18	灰黄褐色	(10YR4/2)	砂質シルト	焼土粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
19	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	黒色粘土粒・黄褐色シルト粒を微量含む。しまり弱い。粘性弱い。
20	黒褐色	(10YR3/1)	細砂	黒色粘土ブロックを少量含む。黄褐色シルト粒を微量含む。しまりやや弱い。粘性弱い。
21	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。SI4貼床。
22	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	黒色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性強い。SI4貼床。
23	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	細砂	黒色粘土ブロックを多量に含む。褐色粘土ブロックを少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
24	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	細砂	褐色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性強い。SI4貼床。
25	黒色	(10YR2/1)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性強い。P48埋土。
26	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
27	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
28	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
29	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。
30	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。遺物含む。
31	黒褐色	(10YR3/1)	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。
32	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	細砂	しまり弱い。粘性弱い。
33	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒を多く含む。しまり強い。粘性強い。SI6貼床。

第 10 図　SI4、SI6、SI7、SD2 土層断面図（1/60）

いずれも方形で、一部サブトレンチを設置して確認したところ、地山砂層・黒色粘土・褐色粘土による貼床を施している。主軸方位は推定不可能な 5 棟を除き、ほぼ真北となるもの 4 棟、N-8 ～ 9° -W が 4 棟、N-12 ～ 16° -W が 4 棟、N-25 ～ 32° -W が 5 棟、N-51 ～ 59° -W が 4 棟となる。カマドは SI2 と SI4 の北壁において、遺構検出面で確認している。SI2 は煙道部が SD1 で壊されている。SI4 カマドは北壁に長大な煙道部が確認された。SI4 は一辺約 8 m の規模を有する大型の建物跡で、サブトレンチを設置して断面の観察を行ったが複数の建物跡の重複は見られず、現状では竈屋等の大型の建物跡の可能性を考えておきたい。竪穴建物跡と掘立柱建物跡や柱穴跡との新旧関係は概ね柱穴跡が新しいが、SI4 の貼床下から P48 を確認しており、竪穴建物跡よりも古い掘立柱建物跡も存在している。



SD5、SI11・12・13・26土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	オリーブ褐色	(2.5Y4/4)	シルト	酸化鉄含む。しまり強い。粘性やや強い。
2	黒褐色	(2.5Y3/2)	砂質シルト	酸化鉄含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
3	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。
4	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色細砂・黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。遺物を多く含む。
6	黒褐色	(2.5Y3/2)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
7	黒褐色	(10YR2/1)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
8	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
9	黒褐色	(10YR3/1)	砂質シルト	酸化鉄含む。しまり弱い。粘性弱い。
10	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	黒色粘土粒少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
11	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	にぶい黄褐色細砂ブロックを多量に含む。しまり弱い。粘性弱い。
12	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
13	黒色	(10YR2/1)	シルト	しまり強い。粘性やや強い。
14	黄灰色	(2.5Y4/1)	シルト	黄褐色シルト粒を多量に含む。しまり強い。粘性やや弱い。
15	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
16	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	黄褐色粘土粒・炭化物粒・焼土粒を含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。遺物多く含む。
17	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	黄褐色粘土粒・焼土粒を含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
18	灰黄褐色	(10YR4/2)	細砂	黄褐色粘土ブロックを含む。しまり強い。粘性強い。SI11貼床。
19	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	焼土粒を含む。しまりやや強い。粘性やや強い。遺物多く含む。
20	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	焼土粒を含む。黄褐色粘土粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
21	黒褐色	(10YR3/2)	細砂	しまり弱い。粘性弱い。
22	黒色	(10YR2/1)	粘土	黄褐色細砂含む。しまり強い。粘性強い。SI12貼床。
23	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
24	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
25	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	炭化物粒・焼土粒を多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
26	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	炭化物粒を多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。SI13柱穴。
27	黒色	(10YR2/1)	粘土	褐色細砂を含む。しまり強い。粘性強い。SI13貼床。
28	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	焼土粒を含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
29	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒色粘土粒含む。しまり強い。粘性強い。SI26貼床

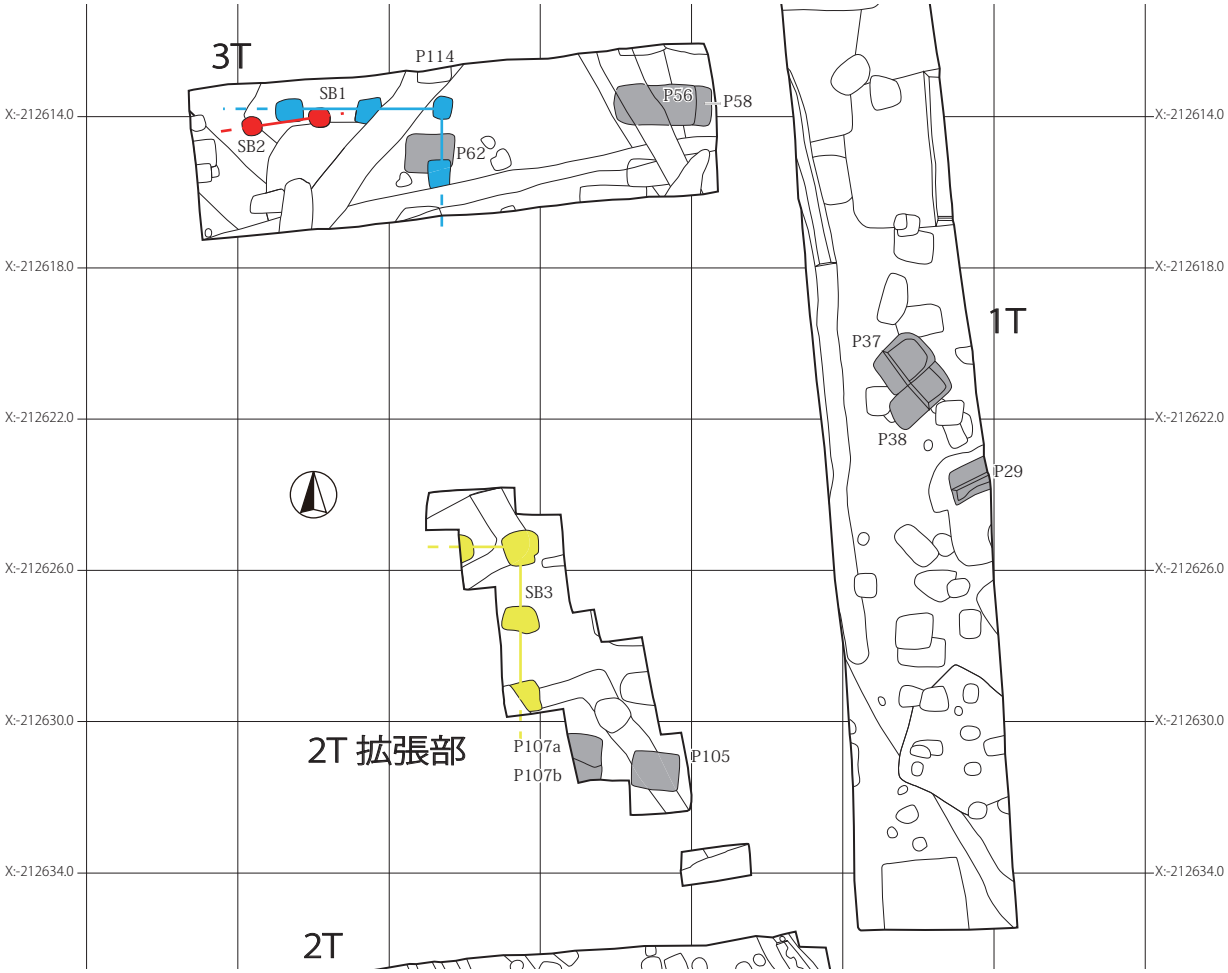
第 11 図　SI11、SI12、SI13、SI26、SD5 土層断面図（1/60）

掘立柱建物跡

多数確認された柱穴跡のうち、現段階で確実に組み合わせが確認され掘立柱建物跡とできるものは、3 トレンチで確認された SB1、SB2、2 トレンチ拡張部で確認された SB3 のみである。

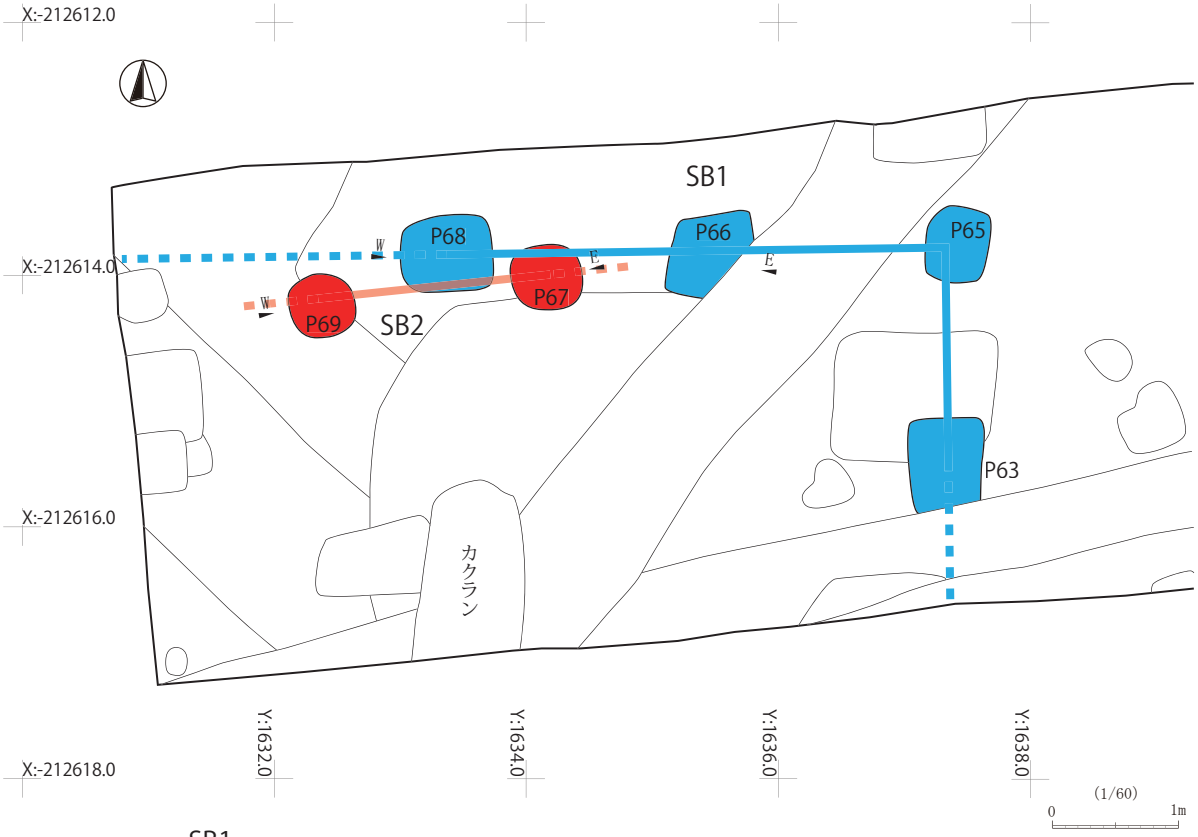
SB1 は、2 × 1 間が確認された側柱建物跡で南、および西側に建物が延びると考えられる。南北方向の主軸方位はほぼ真北である。柱穴跡の平面形は方形、および長方形で、規模は一辺 0.6 ～ 0.7m である。東西方向の柱間寸法は 1.95m、および 1.90m、南北方向の柱間寸法は 1.80m である。P66・68 で半截を実施した。確認面から掘方底面までの深さは 34 ～ 40㎝を測り、P68 で柱痕跡が確認された。P66 の 1 層、および P68 の柱痕跡には十和田 a 火山灰が含まれる。新旧関係は SD6 より古く、SI18・19 より新しい。

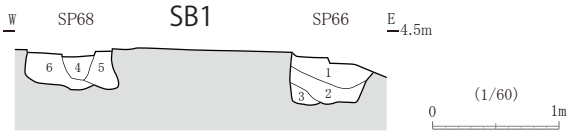
SB2 は 1 間分が確認された建物跡である。柱穴跡の平面形は円形、および隅丸方形で、規模は直径約 0.5m である。東西方向の柱間寸法は 1.70m である。P67・69 で半截を実施した。確認面から掘方底面までの深さは 23㎝を測り、柱痕跡が確認されたが、P69 の柱痕跡には十和田 a 火山灰が多量に含まれる。切合い関係は SI18・19 より新しい。SB1・2 は埋土に十和田 a 火山灰を含むことから 10 世紀前葉以前の廃絶とすることができ、また調査区西側で認められていることから遺跡の範囲、特に掘立柱建物跡を含む官衙的な性格を有する施設が西へと広がることを示唆している。



第 12 図　掘立柱建物跡および半截実施柱穴跡位置図（1/200）

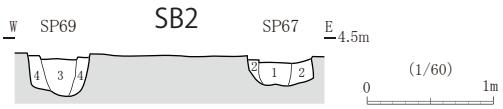
SB3 は 2 トレンチ拡張部で 2 × 1 間分を確認した建物跡で南、および西側に延びると考えられる。南北方向の主軸方位はほぼ真北である。柱穴跡の平面形は方形または不整方形で、規模は一辺 0.65 ～ 1.0m である。南北方向の柱間寸法は 1.88m、および 2.4m である。半截は実施していないが、確認面で柱痕跡を認めている。切合い関係は P109 より古く、SA1 より新しい。





P66・68土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/4)	シルト	褐色シルトブロック・粒を多量に含む。灰白色火山灰を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
2	褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	褐色シルト粒・炭化物粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
3	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	シルト	褐色シルト粒少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
4	オリーブ褐色	(2.5Y4/3)	シルト	褐色シルト粒・灰白色火山灰粒を多く含む。しまり強い。粘性やや強い。
5	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	黒色粘土粒少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
6	黒褐色	(10YR3/1)	砂質シルト	褐色シルト粒を多く含む。しまりやや強い。粘性やや強い。



P67・69土層注記

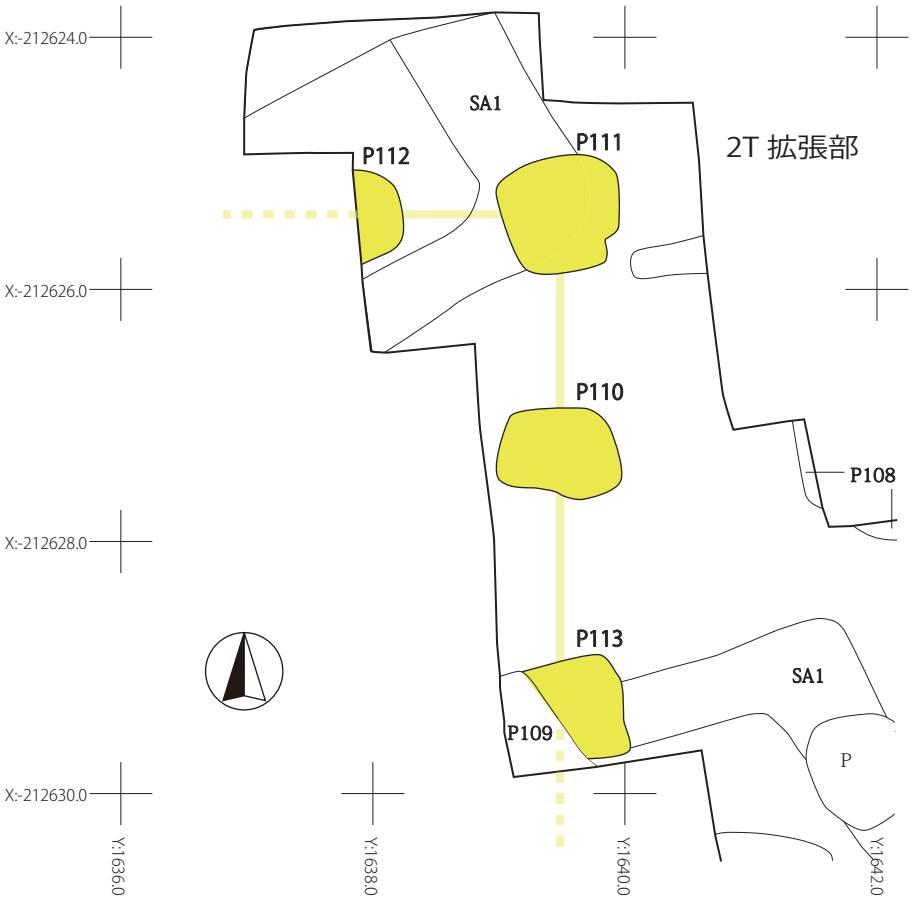
層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	シルト	焼土粒・炭化物粒を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	炭化物粒を少量含む。上層に灰白色火山灰を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
4	灰黄褐色	(10YR4/2)	砂質シルト	炭化物粒を微量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。

第 13 図　掘立柱建物跡 SB1・SB2（1/60）

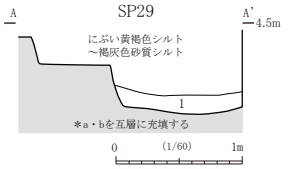
柱穴跡

柱穴跡は、掘立柱建物跡としたものも含めて 126 穴が確認された。1 トレンチ南半と 2 トレンチ、2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中する。なかでも大型の柱穴跡は 1 トレンチ南半と 2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中する。平面形別では長方形 43 穴、円形 33 穴、方形 23 穴、不整方形 17 穴、隅丸方形 5 穴、不整円形 4 穴、楕円形 1 穴である。平面規模で一辺が 1.0m 以上のものは 23 穴、一辺 0.7 ～ 1.0m のものは 20 穴である。一辺が 1.0m 以上のものはすべて平面長方形、一辺 0.7 ～ 1.0m のものは平面方形 9 穴、長方形 6 穴、不整方形 4 穴、円形 1 穴である。平面長方形・方形・不整方形を合わせた数は 83 穴で全体の 65.8%、平面規模 0.7m 以上のものは 43 穴で全体の 34.1% を占める。平面長方形の柱穴跡の主軸方向は、東西もしくは若干北に振れており、掘立柱建物跡の主軸方向は真北か、40°程度西に振れているものと考えられる。

平面規模が一辺 0.7m 以上の大型の柱穴跡 9 穴で半截を実施し、埋土の観察と掘方規模の確認を行った。平面形はいずれも長方形で、規模は P29：0.8 × 1.0m 以上、深さ 0.61m、P37：1.1 × 1.4m、深さ 0.72m、P38：0.9 × 1.8m、深さ 0.52m、P56：0.7 以上× 1.05m、深さ 0.64m、P58：1.0 × 1.4m、深さ 0.73m、P60：0.65 以上× 0.7m 以上、深さ 0.65m、P62:1.0 × 1.25m、P105：1.0 × 1.2m、深さ 0.71m（柱部分 0.81m）、P107：0.55 以上 × 0.8m、深さ 0.65m、

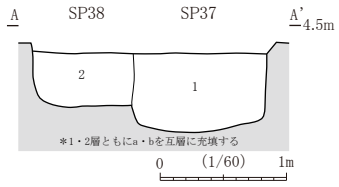


第 14 図　掘立柱建物跡 SB3（1/60）



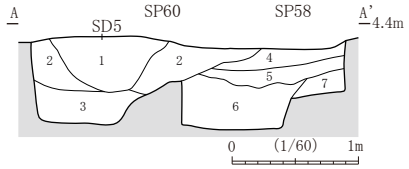
P29土層注記

層No.	土色		土質	備考
1a	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒多量に含む。しまり強い。粘性強い。
1b	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性強い。



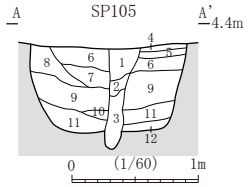
P37・38土層注記

層No.	土色		土質	備考
1a	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
1b	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。黒色粘土ブロックを少量含む。しまり強い。粘性強い。
2a	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
2b	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性強い。



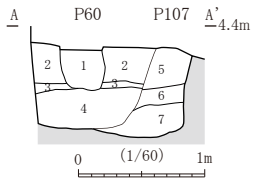
SD5・P58・60土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR2/1)	シルト	褐色粘土粒含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土粒を多量に含む。しまり強い。粘性やや強い。
3	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土粒を多量に含む。しまり強い。粘性やや強い。
4	褐色	(10YR4/6)	粘土	黒色粘土粒を含む。しまり強い。粘性強い。
5	黒色	(10YR2/1)	粘土	褐色粘土粒・灰黄褐色シルト粒を含む。しまり強い。粘性強い。
6	灰黄褐色	(10YR4/2)	細砂	黒色粘土ブロック含む。しまり弱い。粘性弱い。
7	褐色	(10YR4/6)	粘土	黒褐色細砂を含む。しまり強い。粘性強い。



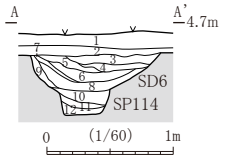
P105土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	褐色粘土粒・炭化物を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	褐色粘土ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	褐色粘土粒を少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
5	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	褐色粘土粒を含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6	黒褐色	(10YR3/2)	細砂	褐色粘土粒を少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
7	褐色	(10YR4/4)	シルト	褐色粘土粒を多く含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
8	褐色	(10YR4/4)	シルト	褐色粘土粒・ブロック・炭化物粒を含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
9	黒褐色	(2.5Y3/2)	シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
10	黒褐色	(2.5Y3/1)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。
11	黒褐色	(2.5Y3/2)	シルト	褐色粘土ブロック・粒を多量に含む。黒色粘土粒を少量含む。しまり強い。粘性強い。
12	黒褐色	(2.5Y3/2)	シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒を多量に含む。しまり強い。粘性強い。



P60、107土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
2	褐色	(10YR4/4)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。黒色粘土粒を少量含む。しまり強い。粘性やや強い。
3	褐灰色	(10YR4/1)	細砂	しまり弱い。粘性弱い。
4	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	褐色粘土ブロック・黒色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
5	褐色	(10YR4/4)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。黒色粘土ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
6	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒色粘土粒を多量に含む。褐色粘土ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
7	黒褐色	(2.5Y3/1)	細砂	黒色粘土ブロックを少量含む。しまり弱い。粘性弱い。



SD6、P114土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	オリーブ褐色	(2.5Y4/4)	シルト	酸化鉄を含む。しまり強い。粘性やや強い。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	明黄褐色シルト粒を含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	明黄褐色シルト粒を多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	明黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
6	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	明黄褐色ブロック・粒を多量に含む。しまり強い。粘性やや強い。
7	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	焼土粒を微量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
8	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	明黄褐色シルト粒・焼土粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
9	灰黄褐色	(10YR4/2)	細砂	褐色粘土粒・黒色粘土粒少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
10	黒褐色	(10Y3/2)	砂質シルト	褐色粘土粒を多量に含む。黒色粘土粒を少量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
11	黒褐色	(10Y3/2)	砂質シルト	褐色粘土粒・黒色粘土粒を微量に含む。しまりやや弱い。粘性弱い。
12	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む。黒色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

第 15 図　柱穴跡土層断面図（1/60）

P114：0.35 以上× 0.9m、深さ 0.66m である。掘方の断面形は、P56 がスロープ状、P58 が階段状を呈する。P105 では柱痕跡が確認でき、掘方底面の柱位置だけをさらに一段掘り下げている。掘方埋土は、基本層序⑤～⑦の砂層・黒色粘土・褐色粘土を混合して用いている。

一辺 1m を超える大型の柱穴跡は 1 トレンチ中央、2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中しており、今回調査していない 2 トレンチ北側から 3 トレンチにかけてのエリアに官衙関連施設の中心的建物跡が存在することが予想される。またこれらの大型の柱穴跡は南北軸が真北、もしくは N-40° -W の傾きを示すものがある。材木塀跡 SA1 の主軸方位が N-40° -W を示しており、同時期の建物跡の可能性がある。また真北を志向する SB3 や P105、P107 が材木塀 SA1 を切っており、後続する中心的建物跡が主軸方位を違えるなど、施設内で大きな構造の変化が起きていることが考えられる。

材木塀跡

材木塀跡 SA1 を 2 トレンチ、2 トレンチ拡張部、3 トレンチで確認した。上幅 0.8m、下幅 0.35m の断面逆台形、深さ 0.6m の布堀状の掘方に黒色粘土・褐色粘土による掘方埋土と材木抜取痕跡を確認した。柱根は遺存していない。抜取痕跡、および遺構底面の形状から、材木は直径 10㎝前後の丸太材の先端を尖らせて杭状に打ち込んだものと考えられる。2 トレンチから北西に直線的に延び、2 トレンチ拡張部で L 字に南西に向かって屈曲する。3.4m の空閑地を挟み同様に L 字に屈曲する材木塀跡が北西に延びる。この 2 本の屈曲する材木塀跡は同一軸線上にあることから、同時期に区画施設として機能していたものと考えられる。材木塀跡の主軸方位 N-40° -W である。検出した総長は北端から南端までで 31m である。重複関係は掘立柱建物跡 SB3、大型の柱穴跡 P105、P107 より古い。柱穴跡の項でも記したとおり平面長方形、一辺 1m を超える大型の柱掘方をもつ掘立柱建物が同時期に存在した可能性がある。

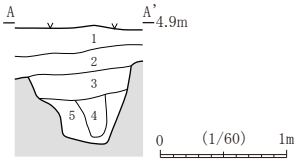
溝　　跡

溝跡は 10 条を確認した。このうち SD6 は基本層序③の遺物包含層を切り込む新しい溝跡である。SD1 は主軸方位 N-85° -W の溝跡で、埋土に十和田 a 火山灰を含む。SD2 は主軸方位 N-8° -W の溝跡で東へ屈曲する。重複関係は SD1 より古い。SD3 は竪穴建物跡 SI3 より新しい。SD5・8・9・10 の主軸方位はそれぞれ N-36・25・30・37° -W で、材木塀跡 SA1 と近い主軸方位を示しており、小規模な区画溝の可能性が考えられる。重複関係は SD5 が柱穴跡 P56 より新しく、SD10 は P99 より古い。SD11 は第 1 次調査で確認した SD13 の延長にあたる。

土　　坑

土坑としたものは SK1 と SK2 がある。SK1 は 1 トレンチ北東隅で確認し SI6 を切っている。人為堆積と考えられるにぶい黄褐色シルトと、暗褐色砂質シルトが交互にみられ、遺物を含む。SK2 は材木塀跡 SA1 より新しい土坑である。

SA1（2T 北壁）



SA1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	オリーブ褐色	(2.5YR4/4)	シルト	酸化鉄含む。しまり強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	炭化物粒を少量含む。しまりやや強い。粘性弱い。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性弱い。
4	黒褐色	(10YR3/2)	細砂	しまりやや強い。粘性弱い。材木塀抜き取り痕跡。
5	黒色	(10YR2/1)	粘土	褐色粘土ブロック多量に含む。しまり強い。粘性強い。材木塀掘方埋。

第 16 図　材木塀 SA1　平面図（1/150）　断面図（1/60）

第 3 節　発見された遺物

今回の調査では平箱で総数 13 箱の遺物が出土しており、その大半は遺構検出作業中に出土したものである。遺物の多くが古代の土師器や須恵器であり、他に土製の支脚、鉄製品、鉄滓、銅製品、砥石、剥片などが出土している。今回の概要報告書の作成にあたり、現時点で図示できた遺物を中心に概要を述べる。

竪穴建物跡出土の遺物

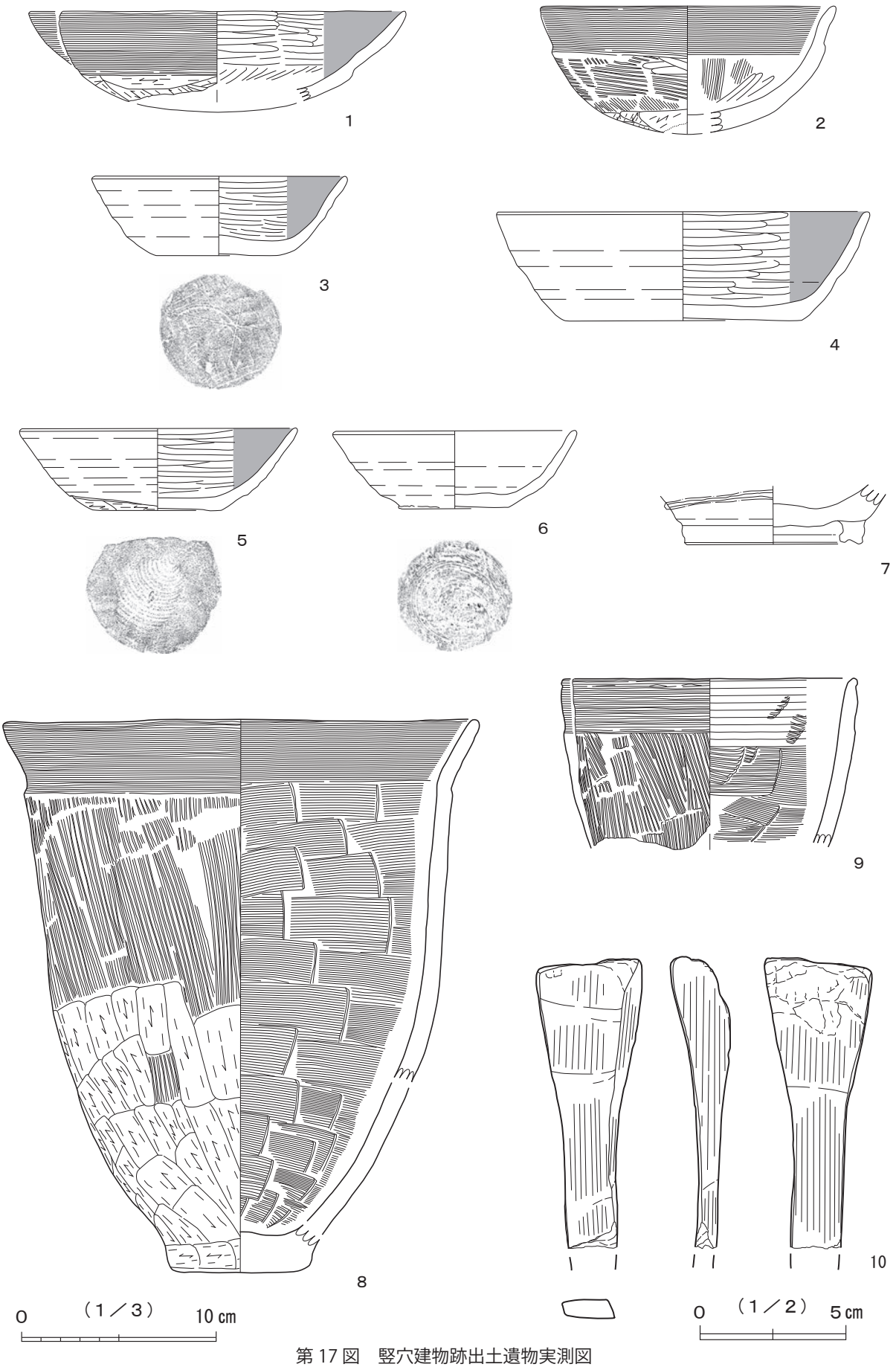
竪穴建物跡からは土師器や須恵器、土製の支脚、砥石などが出土している。これらの大半は遺構の確認作業中に各遺構の埋土上層から出土したものが多く、竪穴建物跡の時期が決定できる資料は極めて少ない。

出土した土師器には製作にロクロ不使用のもの（以下、非ロクロ土師器と表記）とロクロ使用のもの（以下、ロクロ土師器と表記）があり、前者が圧倒的に多い。非ロクロ土師器の器種には坏、鉢、甕などがあり、ロクロ土師器の器種には坏と甕がある。須恵器には坏、甕、瓶類などの器種があるが、量的には少ない。支脚はカマドで使用されたものと考えられ、表面が面取りされて角張っている。

図示できた資料は土師器が 7 点、須恵器が 2 点、砥石が 1 点である。 1 は SI25 上面から出土した非ロクロ土師器の坏である。丸底で外面の体部下位に段をもち口縁部が内弯する器形で、内面にミガキ・黒色処理が施される。 2 ・ 8 ・ 9 は SI 6 の床面に近い埋土から出土した非ロクロ土師器である。 2 の坏は埦に近い器形のもので、体部上位に段をもち、外面がハケメ調整のものである。 8 の甕は 1 個体が横位に倒れた状態で出土した。頸部に段をもち、体部外面はハケメとヘラケズリ、体部内面はヘラナデ調整されている。この土器内部からは焼けた骨片が検出された。この骨片の同定については今後の課題としたい。 9 は頸部外面に軽い段をもち、口縁部が直立気味に立ち上がる鉢で、体部外面はハケメ調整、内面はハケメ、ヘラナデ調整されている。SI12 から出土した 3 と 4 はともにロクロ土師器の坏であり、底部外面のほぼ全面で手持ちヘラケズリの再調整が行われている。この SI12 を切っている SI11 からは 5 のロクロ土師器坏、 7 の須恵器瓶類が出土している。 5 は回転糸切り後に周辺のみ再調整が施される。また 7 は各所に自然釉が掛かる。SI16 出土の須恵器坏である 6 は、底部切り離しが回転糸切りで、その後の再調整が見られないものである。なお、10 の砥石が出土した SI 4 からはロクロ不使用で坏の体部下位、甕の頸部に段を持つ土師器が多く出土している。

掘立柱建物跡出土の遺物

3 棟の掘立柱建物跡が確認されており、構成する柱穴跡のいくつかから土器破片が少量出土している。SB 1 の P63 と P66 では、非ロクロ土師器で体部に軽い段を持つ坏や、頸部に段のない甕が確認される。また SB 2 の P69 からはロクロ土師器の甕が出土している。これら P66 の埋土上層と P69 の柱痕跡からは 10 世紀前葉に降下したとされている十和田 a 火山灰が検出されており、建物跡はそれ以前の時期のものと考えられる。また SB 3 の P110 からは非ロク



第 17 図　竪穴建物跡出土遺物実測図

表２　竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真番号
1	SI-25	土師器	坏	ヨコナデ-ヘラケズリ(一部ヘラミガキ)	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	19.4(推定)			図版10
2	SI-6	土師器	坏	ヨコナデ-ハケメ・ナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ-ナデ・ヘラミガキ	全体の1/2	15.3		6.5(推定)	図版10
3	SI-12	土師器	坏	ロクロナデ-回転糸切り後にほぼ全面手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ほぼ完存	13.2	6.0	4.1	図版10
4	SI-12	土師器	坏	ロクロナデ-ほぼ全面手持ちヘラケズリ(切り離し痕なし)	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/2	19.2	12.2	5.6	図版11
5	SI-11	土師器	坏	ロクロナデ-手持ちヘラケズリ-回転糸切り後に周辺手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/4	14.3	6.7	4.2	図版11
6	SI-16	須恵器	坏	ロクロナデ-回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	全体の2/3	12.6	5.6	4.0	図版10
7	SI-11	須恵器	瓶類	ロクロナデ・体部下方に焼台の接着痕が巡る。その上部は自然釉。	ロクロナデ・底部中央に自然釉。	底部のみ		9.2		図版11
8	SI-6	土師器	甕	ヨコナデ-ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ-ヘラナデ	体部の一部欠損	24.5	7.0	28.5	図版12
9	SI-6	土師器	鉢	ヨコナデ-ハケメ	ヨコナデ-ハケメ・ヘラナデ、黒色処理	口縁部～体部1/6	15.2(推定)			図版12

番号	遺構・層位	種別	特徴	残存	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	写真番号
10	SI-4	砥石	長方形の柱状をなす。4面とも使用されており、中央部は磨り減り、扁平化している。硬質の石材で、仕上げ砥とみられる。	一端部欠損	(9.9)	3.6	1.9	図版12

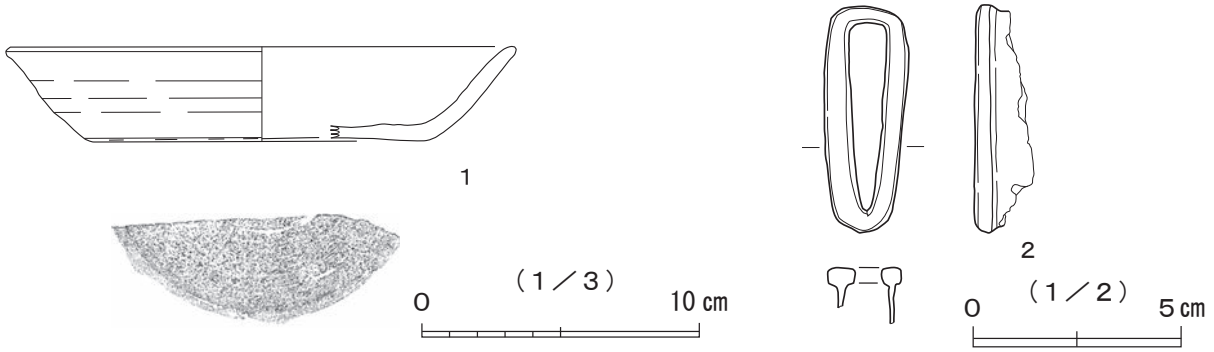
ロ土師器の甕が出土している。

柱穴跡出土の遺物

柱穴跡の段下げ時や半截時に少量の土師器や須恵器が出土しているが、多くは小破片である。土師器では非ロクロ土師器の坏や甕が各柱穴跡の出土遺物として多数確認される。坏では体部下位に段を持ち、内面がヘラケズリ・黒色処理のものが多く、ほかに口縁部に稜を持ち、内面が黒色処理されないものも認められる。甕では頸部に段を持つものと持たないもの、体部調整がハケメ主体のものとヘラナデ・ヘラケズリ主体のものがみられる。P107 は P105 に匹敵するほどの堀方の規模が大きい柱穴跡とみられるが、その堀方埋土中から非ロクロ土師器の甕が出土している。外面はヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデとナデ調整のものである。須恵器の出土量は少ないが、坏や甕、瓶類が確認される。坏では底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの、その後に回転ヘラケズリの再調整が行われているものがある。図示した 1 は堀方の長辺が 1.8m という規模の大きい P38 の柱穴跡から出土したもので、口径に比して底径が大きく、直線的に立ち上がる須恵器坏である。底部は全面に回転ヘラケズリの再調整が施されている。甕では口縁部に波状沈線の装飾を持つものがあり、また瓶類には東海地方の製品の可能性のあるものも含まれている。金属製品の 2 は P38 の堀方埋土から出土した刀剣類の鞘に用いられる銅製の口金具である。

溝跡出土の遺物

SD １・２・３・５・７・８の溝跡から土師器や須恵器、鉄製品が少量出土している。土師器は非ロクロ土師器とロクロ土師器が見られる。非ロクロ土師器の器種では坏と甕があり、これらの整形技法の特徴は前述の遺構出土遺物と共通している。ロクロ土師器の坏では底部が回転糸切りによって切り離した後の再調整がないものがあり、これは溝跡埋土に 10 世紀前葉に降灰したと考えられている十和田ａ火山灰が混入する SD 1 から出土している。須恵器の器種には坏、高坏、甕、瓶類、円面硯があり、口縁部に波状沈線を持つ甕、東海地方製品や福島県会津若松市周辺で操業していた大戸窯跡群の製品とみられる瓶類なども含まれている。鉄製品は刀子とみられる。

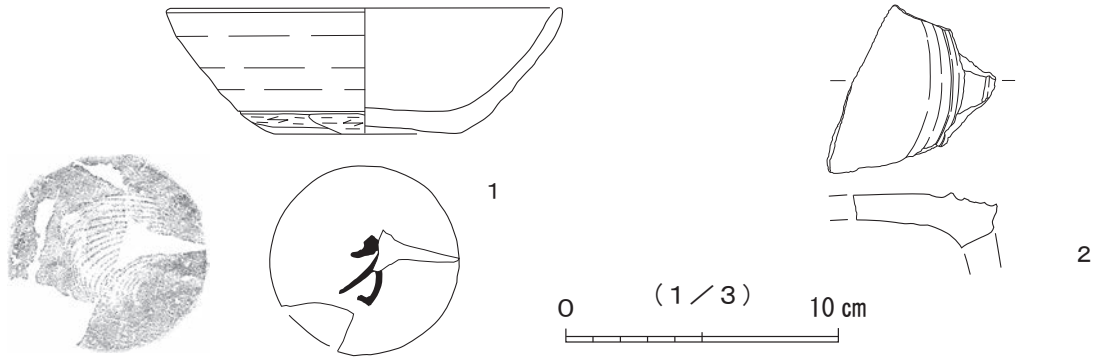


第 18 図　柱穴跡出土遺物実測図

表 3　柱穴跡出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真番号
1	P38	須恵器	坏	ロクロナデ−全面回転ヘラケズリ・線刻あり。	ロクロナデ	全体の1/3	18.4	12.2	3.4	図版12

番号	遺構・層位	種別	特徴	残存	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	写真番号
2	P38	口金具	銅製。刀剣類の鞘口金具。	一部欠損	5.5	2.0	0.7	図版13



第 19 図　溝跡出遺物実測図

表 4　溝跡出土遺物観察表

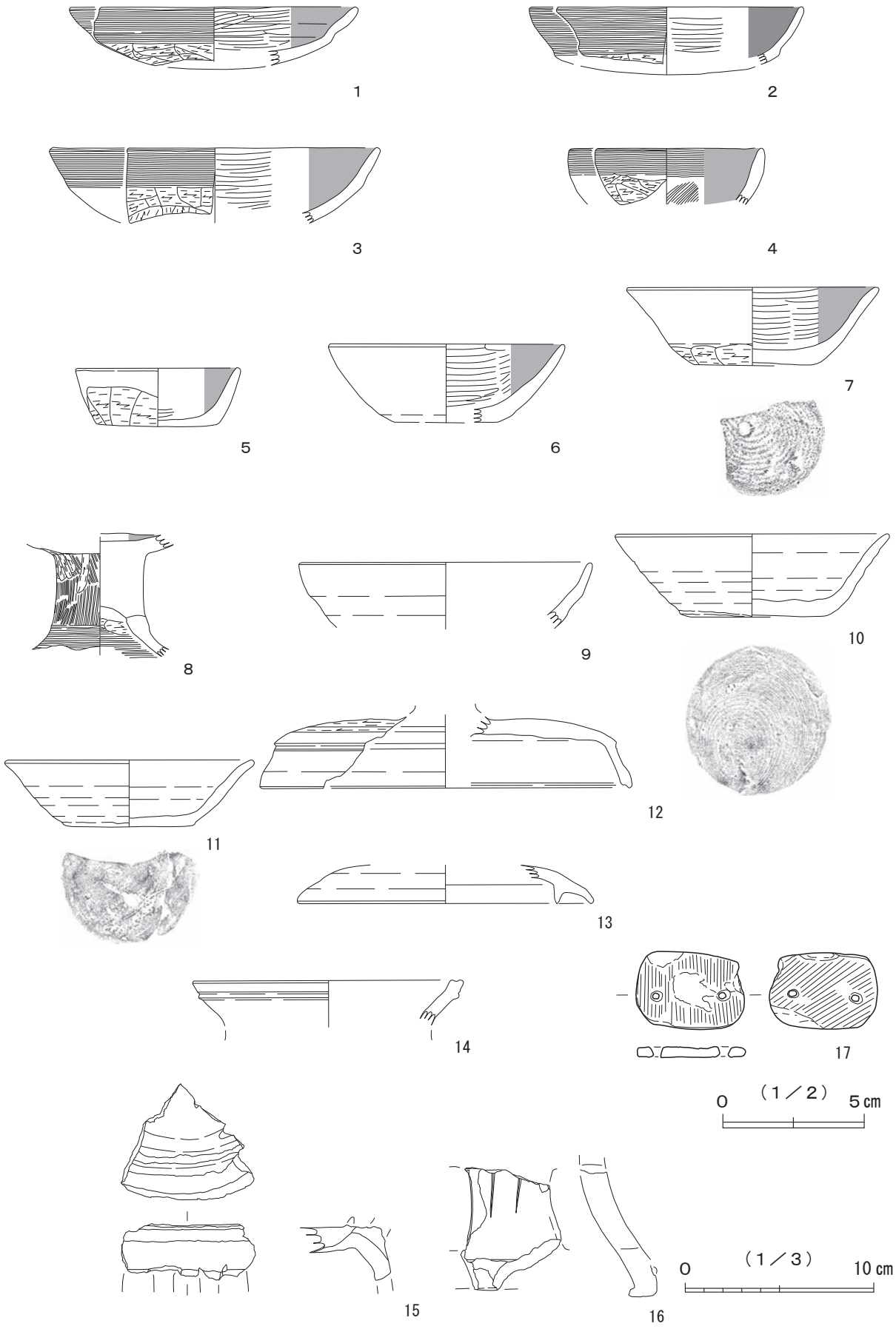
番号	遺構・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真番号
1	SD2	須恵器	坏	ロクロナデ−回転糸切り後に体部下方と底部周辺に手持ちヘラケズリ。 底部中央に「方」とみられる墨書あり。	ロクロナデ	全体の2/3	14.6	7.0	4.6	図版13・14
2	SD2	須恵器	円面硯	ロクロナデ。陸部と海部の境に低い突帯(内堤)をもつ。外堤は欠損。脚部に透かしあり。 海部付近には自然釉が認められる。	ロクロナデ	硯部破片				図版14

第 20 図　土坑出遺物実測図

表 5　土坑出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真番号
1	SK1	土師器	坏	ロクロナデ−底部剥離部に回転糸切り痕。 高台付坏の可能性もある。	ロクロナデ・黒色処理	全体の1/4	14.0	7.0	4.6	図版14

図示した資料の 1 は SD 2 の埋土から出土した須恵器の坏で、回転糸切りで底部を切り離した後に体部下端から底部周辺にかけて手持ちヘラケズリの再調整を施している。底部中央には「方」という墨書が認められる。2 も SD 2 の埋土から出土した須恵器の円面硯である。陸部と海部の境に低い内堤をもち、脚部には透かしを持つものである。外面の海部以外には自然釉が掛かっている。



第 21 図　その他の出土遺物実測図

表６　その他の出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量(cm)			写真番号
							口径	底径	器高	
1	1T-K区	土師器	坏	ヨコナデ-ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	15.4(推定)			図版14
2	4T-C区 包	土師器	坏	ヨコナデ-ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/12	14.6(推定)			図版14
3	1T-G区 包	土師器	坏	ヨコナデ-ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/12	17.6(推定)			図版14
4	1T-G区 包	土師器	坏	ヨコナデ-ヘラケズリ	ヨコナデ-ナデ	口縁部～体部1/10	10.4(推定)			図版14
5	4T-D区 包	土師器	坏	ヘラケズリ、器面剥落。ロクロ製作か不明。	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/2弱	8.8	6.4	3.1	図版15
6	2T-北拡張区	土師器	坏	ロクロナデ-底部切り離し不明。手持ちヘラケズリ再調整か。	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/4	12.6	5.8(推定)	4.2	
7	4T-C区 包	土師器	坏	ロクロナデ-ヘラケズリ-回転糸切り後に周縁手持ちヘラケズリ。	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/3	13.4	6.4	4.2	図版15
8	1T-表土	土師器	高坏	ヘラケズリ・ハケメ・ヨコナデ。脚部下方に軽い段を持つ。	ヘラミガキ・黒色処理	脚部から坏部				図版15
9	4T-D区 包	須恵器	坏	ロクロナデ。体部に凹部あり。	ロクロナデ	口縁部～体部1/10	15.6(推定)			図版16
10	1T-C区 包	須恵器	坏	ロクロナデ-回転糸切り後に再調整なし。	ロクロナデ	口縁部～体部2/3	14.6	8.0	4.4	図版15
11	1T-J区	須恵器	坏	ロクロナデ-回転糸切り後にほぼ全面手持ちヘラケズリ。	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	13.3	7.0	3.55	図版15
12	3T-B区 包	須恵器	蓋か身	ロクロナデ・回転ヘラケズリ。つまみは欠損。	ロクロナデ。籾殻痕(？)あり。	蓋部1/6	19.8(推定)			図版16
13	1T-H区	須恵器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ。カエリをもつ。	口縁部1/8	15.8(推定)			図版16
14	4T-C区 包	須恵器	甕	ロクロナデ。部分的に自然釉掛かる。	ロクロナデ	口縁部1/8	14.4(推定)			図版16
15	1T-F区 包	須恵器	円面硯	ロクロナデ。脚部に複数の透かしあり。内・外堤とも欠損。	アテ具痕・ロクロナデ	硯部破片				図版16
16	2T-東拡張区	須恵器	円面硯	ロクロナデ。脚部に複数の透かしあり。内面に指紋あり。	ロクロナデ	脚部破片				図版17

番号	遺構・層位	種別	特徴	残存	法量(cm)			写真番号
					長さ	幅	厚さ	
17	4T-A区 -包	石製模造品	やや隅丸方形に近いが、鏡形とみられる。一部に剥離面が残るが、両面、周縁とも擦痕が顕著。滑石製。	完存	3.9	2.7	0.4	図版17

土坑の出土遺物

1トレンチ北東隅のSK 1からは1のロクロ土師器坏が出土している。底部切り離しは回転糸切りで、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

その他の出土遺物

重機による掘削中や遺構検出作業中に出土したものである。

土師器には非ロクロ土師器とロクロ土師器が見られる。前者の坏は1～3のように体部中位や下位に段や軽い稜を持ち、対応する内面が屈曲するものとしないものがある。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理が施されている。他に4のような外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がナデ主体の土器も数点認められている。高坏の脚部では8のような脚部下位に段を持ち、外面にハケメ手法の調整が施されているものもある。SI 6から出土した第17図2・9のハケメ調整の坏や鉢との関連が考えられる。甕では頸部に明確な段を持つもの､持たないものがある。ロクロ土師器の坏には7のように回転糸切りで底部を切り離した後に体部下方から底部周縁を手持ちヘラケズリで再調整するものや、回転糸切り切り離し後の再調整がないものがあるが、いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ロクロ使用の坏には内面に油煙とみられる痕跡が認められるものもある。須恵器の坏には11のように底部を回転糸切りで切り離した後に全面を手持ちヘラケズリによって再調整を施すものと、10のように再調整がないもの、ヘラ切りによる底部切り離しのものなどがある。他に9のように体部中位が段に近い凹部をなすものもみられる。12は欠損部がつまみ部への立ち上がりとみて須恵器の蓋と考えたが、高坏の坏部の可能性もある。体部中位に段を持つ器高の低い器形で、口縁端部内面にも軽い段がみられる。13はカエリのある蓋である。15・16は須恵器の円面硯の一部である。15は内・外堤とも欠損するが、脚部に幅1.5㎝ほどの細い透かしが、透かし間と幅を同じくして多数入るものである。それに対し16は透かし間が幅4㎝ほどと比較的広いものである。このほかにも硯部内面に平行タタキ目が残る円面硯の破片がある。

第４節　出土遺物から見た特徴

遺物には土師器や須恵器、土製の支脚、鉄製品、鉄滓、銅製品、砥石などがあり、これらはおもに古墳時代終末期から平安時代にかけてのものである。ここでは土師器などから細かな年代について検討してみたい。

土師器には非ロクロ土師器とロクロ土師器があり、前者は土師器編年の栗囲式から国分寺下層式に、後者は表杉ノ入式に相当するものである。

前者の坏では外面が有段丸底、内面がミガキ・黒色処理の特徴を持つものが多く、甕では頸部に段を持つものと持たないものがみられた。こうした特徴は村田晃一氏が提示した宮城県中部から南部の地域の土器編年の４段階から５段階にあたる坏や甕にあり、年代的には７世紀中頃から８世紀初頭に位置づけられている (村田：2007)。この時期とみられる竪穴建物跡 SI ６の土師器坏 (第 17 図２) や鉢 (第 17 図９) には外面調整にハケメ手法がみられる。類例には仙台市郡山遺跡 (仙台市教委 :2005 ほか) や東松島市赤井遺跡 (矢本町教委 :2001 ほか) 出土の坏や埦があり、また栗原市御駒堂遺跡からも類似した坏が出土している (宮城県教委：1982)。これらの特徴は東北地方北部の土師器に多くみられ、その影響を受けたか、もしくは移入された土器との理解がされている。この時期､あるいはその直後の時期の須恵器には器高が浅い坏、段やカエリを持つ蓋、円面硯などがある。第 18 図１は口径に対して底径が大きい器形の回転ヘラケズリ再調整の須恵器で、類例には大蓮寺窯跡５号窯跡の坏がある (仙台市教委：1993)。第 21 図 12 は須恵器の蓋と考えたが、高坏の坏部の可能性もある。今後の資料の増加を待って再検討したい。

後者の土師器は須恵器の特徴も加えると、平安時代でも前期の９世紀から 10 世紀前葉までの時期のものと考えられる。さらに器形や底部切り離し技法などから、９世紀前半頃、９世紀後半頃､10 世紀前葉頃のものがあり､それぞれ山王遺跡の第２～４群に相当する (宮城県教委：1996)。中でも今回出土の土器は、土師器坏内面のミガキ方向、土師器・須恵器の器形、底部切り離し後の再調整の特徴から９世紀前半頃のものが多くを占めている。またその時期に伴う可能性が高いのが会津若松市の大戸窯跡の製品と考えられる第 17 図７のような須恵器瓶類である。なお、今回の調査で初めて底部外面に「方」と読める墨書土器が出土した。今後さらに文字資料が発見されることが期待される。

今回の調査では古墳時代終末期よりも古い遺物として、第 21 図 17 の石製模造品１点と、玉髄製の剥片が１点が出土している。本来どの層に存在したものかは不明であるが、基本層の年代把握とともに、これらの時期の遺構分布の把握も今後の課題である。

第５節　遺構の年代

第２次調査では遺構の分布把握を主眼としていることから、遺構の掘り下げはごく少数に留まっているが、その中でも遺構の時期が推定されるのは７世紀後半から８世紀前葉頃、９世紀代、10 世紀前葉の頃である。竪穴建物跡では７世紀後半から８世紀前葉頃、９世紀代のものが確認され、それらは１トレンチ北半から３、４トレンチにかけて多く分布する状況が認めら

れる。掘立柱建物跡では小規模な柱穴掘方の埋土に十和田 a 火山灰を含むものが 2 棟確認されたが、そのほかの大きな堀方を持つ掘立柱建物跡や柱穴跡は出土している土器の特徴から、おもに 7 世紀後半から 8 世紀前半の時期の可能性が考えられる。また材木塀跡からは遺物の出土はなかったが、これら大きな堀方を持つ柱穴跡などに切られているところからそれ以前の可能性が考えられる。溝跡には主軸方位などから材木塀跡とほぼ同じ時期、7 世紀後半から 8 世紀前半頃のもの、9 世紀代から 10 世紀前葉の時期のものなどが推定される。土坑の SK1 の時期は 9 世紀後半から 10 世紀前葉頃と推定される。

第４章　総　　括

第１節　調査のまとめ

①第１次調査の南側調査区で確認された官衙的な様相を呈する大型の掘方を有する柱穴跡をはじめとする遺構群は、西側に設定した第２次調査区へも展開し、さらに未調査の西側へ展開することが明らかとなった。

②大型の掘方を有する柱穴跡が多数確認された。中には第１次調査で確認された一辺が１ｍほどの方形の柱穴群よりさらに大型の掘方を有するものも確認された。建物の規模や性格は不明であるが、真北方向に主軸方位を示すものと、N-40°-W の主軸方位を示すものがある。

③掘立柱建物跡や規模の大きな柱穴跡は調査区南側で、竪穴建物跡は調査区北側に密集するという、第１次調査で確認されていた遺構分布状況を再確認した。

④区画施設と考えられる材木塀跡が確認された。L 字に屈曲する２条の材木塀が軸方位 N-40°-W の同一軸線上にみられ、同時期に区画施設として機能していたものと考えられる。出土遺物は無いが、新旧関係は真北方向に軸方位を示す規模の大きな掘方を有する柱穴跡より古い。

⑤竪穴建物跡の時期は７世紀後半～８世紀前葉と９世紀代、規模の大きい掘方を持つ柱穴跡の時期は７世紀後半～８世紀前半、材木塀の時期は７世紀後半以前、埋土に十和田 a 火山灰を含む掘立柱建物跡や溝跡の時期は９世紀～ 10 世紀前葉である。

⑥出土遺物には須恵器円面硯のほか、東海産、および会津大戸産須恵器がある。また須恵器坏底部外面に原遺跡では初めてとなる墨書「方」が確認された。

第２節　遺跡の評価と今後の課題

柱穴跡の掘方の形状、規模の大きさから、律令国家が地域掌握のために設置した官衙的性格の施設が存在することがより一層明らかになった。規模の大きな柱穴跡は第１次調査以上に大型のものが確認され、特に平面長方形のものは最大で 0.9 × 1.8m の規模を有するもの、掘方断面が階段状やスロープ状を呈するものが見られる。掘方規模の大きな掘立柱建物跡の規模、および機能時期を確認することが今後の最大の課題の一つである。

掘方規模の大きな柱穴跡は調査区南側、竪穴建物跡は調査区北側に分布し、第２次調査区よりさらに西側へ広がるものと考えられる。西側へは阿武隈川の自然堤防が延びており、遺跡範囲の確認も今後の課題である。

遺構の主軸方位は材木塀跡 SA1 をはじめ N-40°-W を示すものと、真北を示すものがある。それぞれの時期については新旧関係と共に今後の課題である。

出土遺物は第１次調査で出土した東海産須恵器円面硯に続き、第２次調査でも須恵器円面硯が複数出土しているほか、東海地方や会津若松市の大戸窯跡の製品と考えられる須恵器

が出土している。遅くとも 7 世紀後半には中央とのつながりが形成され、各地の土器が搬入されたものと考えられる。またこれらの土器は海上・河川交通等の水上交通によって運び込まれた可能性が考えられ、原遺跡が阿武隈川に近接する事を考えると、津や阿武隈川に接続する運河のような施設の存在についても今後考慮する必要がある。

遺跡の性格については、『延喜式』の「玉前駅家」や、多賀城跡出土木簡の「玉前剗（関）」と明言しうる要素は得られなっかたが、官衙的性格においての重要度は、第 2 次調査の結果によって、より増したと言える。

【引用・参考文献】

岩沼市　1992 『岩沼市土地分類調査 (細部調査) 報告書・現況調査編』

岩沼市教育委員会　2015 「熊野遺跡 (第 2 次調査) の概要」『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨

岩沼市教育委員会　2017 「岩沼市・原遺跡の調査概要」『第 43 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

岩沼市教育委員会　2018 「岩沼市・原遺跡第 2 次調査の概要」『第 44 回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』

岩沼市史編纂委員会　2015 『岩沼市史」第 4 巻　資料編 I 考古

関根章義　2014 「古代陸奥国における陶硯の受容と展開 - 城柵官衙遺跡を中心として -」季刊『古代文化』第 66 巻第 3 号

仙台市教育委員会　1983 『郡山遺跡Ⅲ - 昭和 57 年度発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第 46 集

仙台市教育委員会　2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 - 総括編 (1)』仙台市文化財調査報告書第 283 集

宮城県教育委員会　1982 「(4) 御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 134 集

宮城県教育委員会　1991 『山王遺跡 - 仙塩道路建設関係遺跡平成 2 年度発掘調査概報 -』宮城県文化財調査報告書第 141 集

宮城県教育委員会　1996 『山王遺跡Ⅳ - 多賀前地区考察編』宮城県文化財調査報告書第 171 集

宮城県多賀城跡調査研究所　1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』

村田晃一　2007 「第Ⅱ章Ⅴ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

矢本町教育委員会　2001 『赤井遺跡Ⅰ - 牡鹿柵・郡家推定地』矢本町文化財調査報告書第 14 集

矢本町教育委員会　2005 『赤井遺跡 2004- 牡鹿柵・郡家推定地』矢本町文化財調査報告書第 17 集

写真図版

1 トレンチ SD2　墨書土器出土状況（北東から）

1トレンチ遺構検出状況（南から）

1トレンチ遺構検出状況（北西から）

2 トレンチ遺構検出状況（西から）

2 トレンチ遺構検出状況（北東から）

3 トレンチ遺構検出状況　（西から）

3 トレンチ遺構検出状況（南西から）

4トレンチ遺構検出状況（西から）

4トレンチ遺構検出状況（南東から）

1 トレンチ北側竪穴建物群（南東から）

SI6、SI7（北東から）

SI4 カマド（南東から）

SI4 遺物出土状況（南西から）

SI6 土師器坏・甕出土状況（南東から）

SI6 土師器甕内骨片出土状況（南東から）

SI12 遺物出土状況（南西から）

SI13 遺物出土状況（南東から）

掘立柱建物跡 SB1・2（南西から）

掘立柱建物跡 SB3（北西から）

掘立柱建物跡 SB1　P68 半截（南から）

掘立柱建物跡 SB2　P69 半截　（南から）

P29 半截（南から）

P37・38 半截（北東から）

P56 半截（南から）

P58 半截（南から）

P62 半截（北から）

P105 半截（北から）

1 トレンチの柱穴跡群（南東から）

2 トレンチの柱穴跡群（東から）

SA1 材木抜取痕跡（2T　北西から）

SA1 材木抜取痕跡（2T　東から）

SA1 南側屈曲部（北西から）

SA1 北側屈曲部（南から）

2 トレンチ拡張部（北西から）

調査区全景（上空から）

原遺跡上空から岩沼市街を臨む（南から北を臨む）

原遺跡上空から阿武隈川を臨む（北西から南東を臨む）

竪穴建物跡出土遺物 1　土師器 坏

竪穴建物跡出土遺物 2　土師器 坏

竪穴建物跡出土遺物 3　土師器 坏

竪穴建物跡出土遺物 2　土師器 坏　ハケメ調整

竪穴建物跡出土遺物 3　土師器 坏　内面

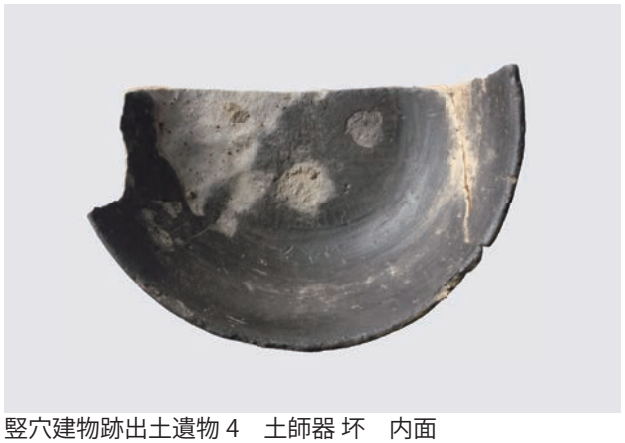
竪穴建物跡出土遺物 6　須恵器 坏

竪穴建物跡出土遺物 3　土師器 坏　底部外面

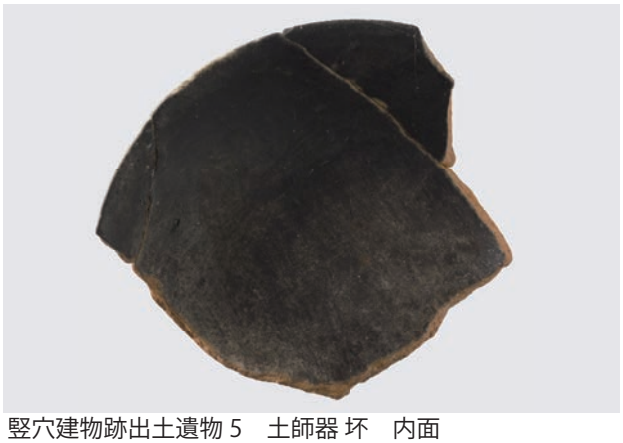
竪穴建物跡出土遺物 6　須恵器 坏　底部外面

竪穴建物跡出土遺物 4　土師器 坏

竪穴建物跡出土遺物 5　土師器 坏



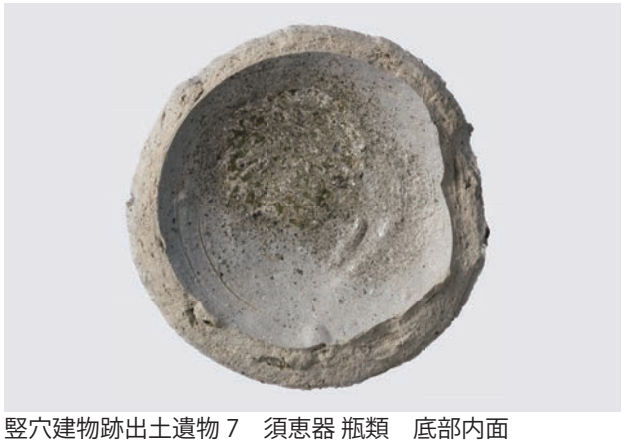
竪穴建物跡出土遺物 4　土師器 坏　内面



竪穴建物跡出土遺物 5　土師器 坏　内面

竪穴建物跡出土遺物 4　土師器 坏　底部外面

竪穴建物跡出土遺物 5　土師器 坏　底部外面



竪穴建物跡出土遺物 7　須恵器 瓶類　底部内面

竪穴建物跡出土遺物 7　須恵器 瓶類　底部外面

竪穴建物跡出土遺物 10　砥石 a

竪穴建物跡出土遺物 10　砥石 b

竪穴建物跡出土遺物 8　土師器 甕

竪穴建物跡出土遺物 9　土師器 鉢　外面

柱穴跡出土遺物 1　須恵器 坏

竪穴建物跡出土遺物 9　土師器 鉢　内面

柱穴跡出土遺物 1　須恵器 坏　底部外面

柱穴跡出土遺物 2　刀 口金具

溝跡出土遺物 1　須恵器 坏　底部外面 墨書

溝跡出土遺物 1　須恵器 坏

溝跡出土遺物 2　須恵器 円面硯

土坑出土遺物 1　土師器 坏　底部外面

溝跡出土遺物 2　須恵器 円面硯

その他の出土遺物 1　土師器 坏

その他の出土遺物 2　土師器 坏

その他の出土遺物 3　土師器 坏

その他の出土遺物 4　土師器 坏

その他の出土遺物 5　土師器 坏

その他の出土遺物 7　土師器 坏

その他の出土遺物 8　土師器 高坏

その他の出土遺物 7　土師器 坏　底部外面

その他の出土遺物 10　須恵器 坏

その他の出土遺物 11　須恵器 坏

その他の出土遺物 10　須恵器 坏　底部外面

その他の出土遺物 11　須恵器 坏　底部外面

その他の出土遺物 9　須恵器 坏

その他の出土遺物 12　須恵器 蓋（坏身か）

その他の出土遺物 13　須恵器 蓋

その他の出土遺物 12　須恵器 蓋　内面 籾殻痕（？）

その他の出土遺物 14　須恵器 甕

その他の出土遺物 15　須恵器 円面硯

その他の出土遺物 15　須恵器 円面硯　内面 指紋

その他の出土遺物 15　須恵器 円面硯

その他の出土遺物 16　須恵器 円面硯

その他の出土遺物 16　須恵器 円面硯

その他の出土遺物 17　石製模造品 a

その他の出土遺物 17　石製模造品 b

報告書抄録

ふりがな	はらいせきだいにじちょうさがいようほうこくしょ
書　　名	原遺跡第2次調査概要報告書
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 19 集
編集者名	川又隆央・永井三郎・太田昭夫
編集機関	岩沼市教育委員会
所在地	〒 989-2480　宮城県岩沼市桜 1 丁目 6-20　　TEL0223-22-1111
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 31 日

所収遺跡	所在地	市町村コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原遺跡（はらいせき）	岩沼市（いわぬまし） 南長谷（みなみはせ） 字上原（あざかみはら）ほか	042111	15053	38° 08′ 46″	140° 85′ 20″	20171101 ～ 20171228	349㎡	確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡（はらいせき）	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 柱穴跡 材木塀跡 溝跡 土坑	土師器 須恵器 金属製品 石製品	掘方規模の大きな柱穴跡、区画施設として材木塀跡を確認した。須恵器円面硯が複数個体出土している。

要約

原遺跡が所在する岩沼市玉崎地区は、『延喜式』の「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡の「玉前剗（関）」の比定地とされてきたが、平成28年度の圃場整備に伴う第1次調査で掘方規模の大きな柱穴跡、東海産と考えられる須恵器円面硯が出土し、その可能性が高まった。

第2次調査では、第1次調査で発見された遺構群の西側への広がりと建物跡の規模・時期・性格などを確認するためのトレンチ調査を実施した。

調査の結果、駅家や剗の存在を示す資料は得られなかったが、第 1 次調査以上に規模の大きな掘方を持つ柱穴跡や、区画施設と考えられる材木塀跡を確認した。遺構はさらに西側へと広がることも確認した。官衙関連施設としての重要性はさらに高まったと言える。

出土遺物は須恵器円面硯のほか、東海産、および会津大戸窯産須恵器がある。また須恵器坏の底部外面に、原遺跡では初めてとなる墨書「方」が確認された。

岩沼市文化財調査報告書第 19 集
原遺跡第 2 次調査概要報告書
平成 30 年 3 月 31 日
発行　岩沼市教育委員会
岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号
生涯学習課　TEL0223-23-1111　内線 573
印刷　株式会社　国井印刷
岩沼市藤浪一丁目 4-35　TEL0223-22-2221